

台湾最初の児童文学家・西岡英夫研究序説
—大正期・台湾における「お伽事業」の創始

中 島 利 郎

臺灣最早の児童文學者:西岡英夫

NAKAJIMA, Toshio

岐阜聖徳学園大学

紀要第54集

2015年2月

台湾最初の児童文学家・西岡英夫研究序説 —— 大正期・台湾における「お伽事業」の創始

中 島 利 郎

第一章 西岡英夫と巖谷小波、後宮信太郎

日本統治期の台湾において活躍した児童文学家・西岡英夫は、膨大な著作を残している（付録「西岡英夫著作目録（稿）」参照）。それは児童文学に限らない。なぜならば、西岡英夫は先ず実業家として生活を支えており、その上にあつて随筆家、俳人、翻訳家、口承文芸家、児童文学作家及び研究者であった。早稲田大学を卒業するやその専門性を生かして経営・経済関係の単行本を出版し、台湾に渡ってからは、原住民族を含む台湾の風土・風俗を台湾の日本人や「内地」に紹介し、俳句を詠み、仏教を含む広範な随筆類を書き、英文文芸を翻訳し、そして児童文学に関しては、自ら学校や放送局等で童話の口演をし、且つ台湾の原住民族及び漢族の伝説を収集し、児童文学を創作をし、評論し、研究し、台湾における初めての「お伽事業」を実施したのである。また、発表紙誌は台湾内に限っても、『法院月報』『台法月報』『台湾教育』『台湾時報』『台湾警察協会雑誌』『台湾警察時報』『専売通信』『社会事業の友』『黎明』『薫風』『青年之友』『台湾日日新報』『第一教育』『南国青年』『学友』『児童劇』『児童街』『婦人と家庭』『台湾婦人界』『南羸仏教』『南羸仏教会会報』『台湾仏教』『台湾芸術新報』等と様々である。その他に「内地」の少年向け雑誌『少年世界』（博文館、主筆・巖谷小波）や研究誌『童話研究』（日本童話協会）をはじめ多数の雑誌類に寄稿しているようである。さらに、「お伽事業」（現在では「児童文学」という言葉に置き換えられる。西岡英夫の「お伽事業」の内容については後出）の一環として『科外読本 台湾れきし噺』（台湾日日新報社）や「台湾童話集／生蕃童話集」（世界童話大系刊行会『世界童話大系 第一五巻 支那』）を出版している。

このように西岡英夫は多くの著述を残しているのだが、彼の生涯に渡る履歴は — たとえば生年は判るが、卒年は不明等 — ほとんど判っていない。戦前に発表された西岡英夫に関するまとまった履歴には、以下の三種の資料がある。

第一種は、大正三年（一九一四）一月一日に台湾教育会『台湾教育』第一四一号に発表した西岡英夫「お伽事業の本島普及に対する希望」という一文の前に、『台湾教育』の「編者附記」として付けられた以下のような紹介がある。（以下「編者附記」という）

西岡氏は三十八年の早稲田大学の出、在学中及び卒業後報知新聞に記者たりし当時より、常に各種の少年雑誌に執筆し、傍ら小波氏主宰の木曜会の一員として春浪、小舟、桜桃、佳水、武彦等の士と共にお伽事業の普及に力を尽し、渡台後亦常に塘翠の号により東京諸雑誌の為に、本島風俗習慣を紹介し猶お伽噺と本島の新聞雑誌に揚げたるもの多くも同氏の近業に「紫の星」「木太刀一撃」「雛菊物語」及び「紙虎物語」等あり①（編者付記）

第二種は、昭和十一年一月七日に口演童話家・久留島武彦の還暦記念を祝い、関係諸家

の久留島に関する感想が『いぬはりこ』と題して出版された（家の教育社）。その中に西岡英夫の「懐しの名尾上新兵衛君」という一文と共に、西岡英夫の履歴が載っている（ただし、「明治十二年」の生年を「明治十七年」と誤記している。以下「いぬはりこ」という）。

明治十七年十一月四日東京市に生る、現在台北製塩株式会社常務取締役、日本童話協会に参加、大阪童話教育研究会に仲間入りす。台湾にては台北童話芸術聯盟を組織し、目下会長を退き顧問となつてゐる。作品として雑誌には台湾伝説を童話化したものや童話教育声音教育に関するものを発表し纏まつたものは世界童話大系中に台湾童話集を収め最近はコロムビアレコードに台湾伝説童話を吹込む。

第三種は、昭和一八年一一月帝国秘密探偵社発行の『大衆人事録外地満・支海外篇』一四版の以下の記述である②。（以下「大衆人事」という）

西岡英夫 台湾煉瓦 台湾証券 台湾映画電機各（株）監査 台北市御成町四ノ二電五九一三〔閩歴〕佐賀県遼明の長男明治十二年十一月四日東京都京橋区に生る同卅九年早大政経科卒業報知新聞社函館水力電気台銀等に歴勤曩に台北製塩専務たり宗教曹洞宗〔家庭〕妻末野後宮新太郎妹 長男達一（大五）慶大卒昭和飛行機工業勤務

以上が今知ることの出来る西岡英夫の履歴に関する資料である③。この他には西岡英夫が書き残した著作の中から、彼に関する履歴を抜き出すことが可能である。

そして、これらの資料類を踏まえて、西岡英夫の経歴及びその台湾での児童文学普及運動の一端を明らかにしたものが、一九九九年二月に発表された游珮芸の「台湾における童話普及運動の中心人物・西岡英夫」④である。游珮芸は、上記三種の資料に加えて、『台湾教育』や『童話研究』等に掲載された西岡英夫執筆の文中に見える履歴情報を基に「西岡英夫の経歴」を「（一）巖谷小波との縁故」及び「（二）渡台後の活動」に分けて描いている。現今ではこれが最も充実した西岡英夫の経歴だといえる。しかし、游珮芸の西岡英夫に関する上記の一文が発表されてから、すでに一五日程が経っており、この間の台湾文学の研究は、台湾における資料の開放及び日台における資料の発掘・整理からはじまり、重層する作品論、作家論の充実、台湾文学史の出版など、日本統治期に限ってみても研究環境はおおいに変化した。台湾の児童文学研究も一般の台湾文学研究ほどではないにしろ、その影響を受けて次第に、研究が拡充し深化して来た。そこで、本章では西岡英夫に影響のあった二人の人物、巖谷小波と台湾のある日本人実業家について考察し、游珮芸の西岡英夫の「経歴」に新たな補充を試みることにする。

先ず、二種の資料について見よう。

第一種は、巖谷小波の「丁亥日録」（明治二十年<一八八七>四月）である。この日録は『巖谷小波日記〔自明治二十年至明治二十七年〕翻刻と研究』の中に見える⑤。

八日 曇晴

教会へ行前日曜学校下読 教会へ出ル 和田垣氏来
ラズ故二日曜学校休ミ 青年舎へ寄ル 十二時帰ル

午後三時前上車 山城町兄公宅へ行き 三時過ギヨリ辻
 古我氏及ビ二弟ト停車場へ行ク、兄公ヲ迎ヒニ行クナリ
 西岡時姉、英夫氏モ来レリ 兄公帰京 共ニ山城町（以下略）

上に出て来る「西岡時姉」とは、西岡時子で、「英夫」は西岡英夫である。西岡時子は英夫の姉であり、英夫はこの当時は満八歳であった。因みに巖谷小波は一七歳。西岡家が巖谷家と交流があったのは、英夫の父の逾明（号・宜軒）と小波の父の修（号・一六居士）が文学を通じての友人だったためである。故に英夫も小学校卒業時分には頻繁に巖谷家に入出しており、その頃まだ部屋住みだった小波とも交遊があり、その影響で少年文学を好み、また小波が二〇歳の時に出版した出世作『こがね丸』（博文館、明治二四年<一八九一>）を著者より贈呈され、それを耽読して児童文学（当時の言葉では「お伽事業」）の道を歩むようになる。それは一一歳の巖谷小波がドイツ留学中の兄立太郎からオットーのメルヘン集（メルヘンシャッツ）を贈られたことが、後に童話創作等に没頭する遠因になったことにも似ていた。明治一九年（一八八六）、姉の西岡きみが小波の兄で巖谷家の長男でドイツ留学から帰国した立太郎と結婚し縁戚となったので、関係はますます親密になったと想像できる（明治二四年一月二三日に立太郎は肺病で死去。享年三八歳）。早稲田大学卒業後は報知新聞社に入ったが、その頃小波が主宰する「木曜会」に参加が許され、当時著名だった押川春浪、木村小舟、武田桜桃、竹貫佳水、久留島武彦等を知り、「お伽芝居とかお伽話とか、恠うした児童を相手の、文芸方面を主とした事柄に興を覚え」、その影響を大いに受けたのである⑥。つまり、渡台以後の「お伽事業」に対する情熱は、幼少から青年期にかけて巖谷小波宅で培われたと言っても過言ではないのである。

第二種は、戦前台湾の文学界で活躍した西川満が、戦後に出版した伝記小説『黄金の人』（新小説社 昭和三二年七月七日）で、次のような一節がある。

～三番目の妹の末野は、もう廿二になっている。母の手を、少しでも軽くするために、信太郎は、明治四十二年七月、末野を台湾に呼びよせた。（以下略）

大正三年は、父、力の十三回忌である。命日には、そのころ西岡家に嫁いでいた末野も、詣りに来た。

西川満の『黄金の人』は、後宮信太郎という人物の伝記である。上記の短文では判りにくいので、些か解説を加えると「後宮信太郎は八人弟妹であった。信太郎は長男で、その三番目の妹の末野は二二歳になった。年老いた未亡人の母トミの労苦を軽減するために、信太郎は明治四十二年七月に郷里の京都府下にいた末野を台湾に呼び寄せた。」次いで「大正三年（一九一四）は、信太郎の父の十三回忌で、命日には西岡英夫に嫁いだ末野も台北の駅前にあった後宮新太郎家にお参りに来た。」つまり、「信太郎」の妹の末野は、台湾で大正三年までに西岡英夫と結婚していたのである。上記の引用の「信太郎」が、後宮信太郎である。いま、その経歴等を台湾新民報社調査部編『台湾人士鑑』（台湾新民報社 昭和九年三月二五日）から抜き書きしてみれば、以下のようである。

物は、西岡英夫の生涯に決定的な影響を与えたと言えるし、彼らの存在がなかったならば、西岡の台湾での「お伽事業」もなかったのではないかと思われる。

西岡英夫の幼少時の事は不明である。「大衆人事」に「佐賀県遼明の長男」とあることから、本籍が佐賀県のようにあること、西岡遼明の長男で「明治十二年十一月四日東京都京橋区に生」れたことが判るのみである。明治三九年（一九〇五年、「編者附記」では一九〇四年）早稲田大学政経科を卒業したが、卒業後は『報知新聞』の記者になったという（在学中もしていたようだ）。また卒業に前後して、実業の日本社から『立身と繁昌』『商人と文章』（共に一九〇六年）、『商賈と勘定』（〇七年）を出版している。おそらく政経科という専門性を生かしての出版だったのだろう。その後、どのような理由か判らないが函館水力電気勤務を経て、明治四二年（一九〇九）末までには台湾に渡ったと思われる。西岡英夫の渡台時期については、游珮芸が『植民地台湾の児童文学』の中で、西岡英夫の渡台時期を「大正初期であろう」と推測している。西岡は明治四一年（一九〇八）二月に「五稜郭」（『少年世界』第一四巻第二号）を、明治四二年（一九〇九）六月に「北海の大公園（大沼、小沼、駒ヶ嶽）」（『少年世界』第一五巻第八号）を発表しており、これは当然北海道での自らの見聞であろうから、したがって明治四一、二年六月以前までは函館水力電気に勤めていたことが判る。そして、明治四三年一月一日発行の台湾の『法院月報』第四巻第一号に「基隆の半時間」を掲載し、その中に「初めて渡台したる余は荷物を纏めて鎌倉丸から棧橋に下り立つ」とあることから、西岡の渡台は「大正初期」ではなく、おそらく明治四二年の後半年中に行われたと推測できる。西岡の渡台の理由は定かではないが、台湾総督府法院の法務部に勤務し、『法院月報』第四巻第一号以降、ほぼ一年半に渡って毎号、台湾の風物や風俗随筆を連載した。尚、これ以降執筆の際には、「西岡英夫」という実名以外に、「塘翠、塘翠生、塘翠子、英塘翠、西岡塘翠、みどり、たうすゐ、圃畔学人、塘翠迂人、西岡生、石蘭居塘翠、TOSUI、石蘭居生、石蘭居主人、にしをかひでを」等の筆名、号、室号を使用している。

前述したように西岡英夫は大正二年前後に、後宮信太郎の妹末野と結婚したようである。注⑧（後出）に挙げた大正二年（一九一三）六月一日発行の「生蕃人の舞踊と其の史的研究（文学博士久米邦武氏所説）」には、この年の二月初旬に「当時相州湯河原温泉に病痾を養はれて居らるゝ文学博士久米邦武博士を訪ね」たとあるので、西岡がこの頃「内地」に帰っていることが判る。当時、まだ新婚旅行という言葉や習慣は定着していなかったが、「内地」に実家があれば、特に末野の場合、実家に老母トミが健在であったならば、二人は必ず結婚の報告に末野の実家に帰ったのではないかと思われる。故に西岡のこの湯河原温泉行はその折りに行われたのではないかと推測される。西川満の『黄金の人』の中にあるように、大正三年にはすでに二人は結婚していたということを前提に、瑣末な資料からの推測ではあるが。西岡と末野がどのように知り合ったのかは不明だが、この結婚は西岡にとっては非常に重要であった。家庭を持つことでの精神的な安定を得、そして多忙で煩瑣な役人生活からの脱却と物質的社会的な生活の安定も得た。後宮信太郎が社長である台北製壘株式会社常務取締役や台湾煉瓦の監査役がそれである。そして、この安定こそが自分の夢の実現への道を歩ませたのだ。故に、來台五年目の大正三年に、「お伽事業」の開始を宣言するのである。

第二章 西岡英夫の「お伽事業」

來台以降の西岡英夫は、台湾総督府法院の法務部に勤務し⑧、明治四三年（一九一〇）一月の『法院月報』第四卷第一号以降、ほぼ一年半に渡って毎号（『法院月報』は、翌明治四四年一月から『台法月報』に名称を変更した）台湾の風物紹介や風俗随筆を連載したが、その後の大正三年（一九一四）一月一日から「通俗教育」の一環として「お伽事業」関係の啓蒙的な文章を台湾教育会発行の『台湾教育』に断続的に発表した（当時の「通俗教育」という言葉は、学校教育を除き家庭教育を含む「社会教育」をいう）。その第一作が西岡英夫（塘翠）「お伽事業の本島普及に対する希望」であった。これは、西岡英夫個人が最初に台湾の児童文学に言及した文章に止まらず、台湾における近代児童文学研究の濫觴ともなった一文である。それまでの台湾には台湾総督府民政部総務局学務課編の日本語・台湾語並記の『昔話 第一桃太郎 第二埔里社鏡』（明治三八年<一九〇五>一〇月序）や平澤丁東（清七）「御伽材料 豚の番人」（『台湾教育会雑誌』第一一六号、<明治四四年<一九一>一〇月）、それに宇井生「台湾の童話」（『台湾教育』第一二七号、大正元年一〇月）、「台湾の子守歌及童謡」（『台湾教育』第一二八～一三〇号、大正元年一二月～大正二年二月）等の出版があるのみであった。単に日本や台湾の昔話や歌が紹介されているだけであり、それをどのように台湾の子供に対して活用するのかという所謂「お伽事業」については皆無であった。

西岡英夫が、台湾においてなぜ「お伽事業」を行おうと考えたのだろうか。それは当然幼少時より出入りしていた巖谷小波及びその周辺に集う文人たちの影響が極めて大きかったということの外に、「お伽事業」については西岡自身が確たる指針を持ち、子供たちに対するその効果を熟知していたからであると、先ず言えよう。その上で、台湾の大人たちの低趣味と、そしてそれに伴う台湾の子供たちの「お伽事業」空白の現状を見たので、大正三年の正月にこのような文章を発表して、台湾における「お伽事業」開始の宣言をしたのである。西岡は次のように述べている。

ところで本島に於ける内地人の趣味はと観れば、頗る低下するものが多く、高尚なる趣味は遺憾ながら得難いのである。頃日屢々新聞紙などで、趣味ある娯楽の欠乏を訴ふるの声を聞くのは、畢竟するに本島に於ける趣味の低下であると云ふ結果で、従つて内地の如くお伽事業などの児童上の問題には、漸く冷淡にされてあるかの傾向があるのは本島のため少年少女のために、誠に可憫なことであると云はねばならぬ。（中略）まづ例証として多くの人の家庭を視ると大抵の人々は閑余読書と云つた如き趣味の事など棄にたくもなく、まづ寸暇あれば酒色に耽るか、さもなれば家庭にて口にすべからざる座談に時を冗費する類か、稍々高上して囲碁玉突などに耽る位である。

（『台湾教育』第一四一号）

大人の低趣味が原因で — その低趣味とは、余暇を利用しての読書等は論外で、酒色や家庭では聞くに堪えない猥雑な座談や、良いといってもせいぜい囲碁やビリヤードくらいなもので、その結果子供たちに対する家庭内教育もなく、また「お伽事業」等の子供の情操に関する問題には極めて冷淡である。そこで、西岡は「内地」を参考にして「お伽事業」の台湾での普及を企画しようとしたのである。しかし、注意しなければならないのは、以上の引用文で批判されている大人は「内地人」なのである。「内地人」の低趣味を批判しているのだから、ここで言う「本島のため少年少女のため」というのは、「内地人」の子供たちに限定され、西岡の「お伽事業」

も在台「内地人」、つまり小学校に通う子供たちに対しての事業と理解されるのである。この一文が発表された翌大正四年の台湾の総人口は三四一万人、その中で日本語理解者率は1.63%と言われているので⑨、公学校（台湾人の子供たちの通う小学校）の生徒たちや就学前の本島人（台湾人）の子供たちについては、西岡の視野にはまだは入っていなかったのかも知れない。それでは、西岡における「お伽事業」の目的は何かと言えば、以下のようなものであった。

児童の^マ育は一面学校教育と相俟つて、家庭教育に因るを要とするは今更云ふまでもないが、家庭教育の主とするは高尚なる趣味を児童に涵養せしめ向上せしむるのである従つてこれが涵養向上せしむるには、趣味多き何物かを要求するので、お伽事業は正にこの目的に副ふるものと云ふべく、お伽事業の目的は正に此処に存せしむるを要するのである。（中略）このお伽事業なるものが、児童に高尚なる趣味を持たしめ向上せしむると云ふ上からも学校教育即ち児童教育上からも等閑視すべきものでなく、大いに鼓吹せねばならぬこと思ふ
（『台湾教育』第一四一号。傍点は西岡英夫。一字欠字はおそらく「教」）

学校教育はもちろん大切であるが、児童の教育で大切なことは家庭教育であり、家庭教育こそが「高尚なる趣味を児童に涵養せしめ向上せしむる」。そして児童を涵養し向上させるためには、児童たちが求める多面的な興味を満足させなくてはならない。その要求に応えるのが「お伽事業」の目的であり、その存在価値があるのだ、と西岡は言っているが、より具体的には「お伽事業に対する用意と覚悟」（『台湾教育』第一四四号 大正三年四月）の中で、次のように述べている。

～殊に低趣味の人の家庭では、娯楽機関の乏しき殖民地なのでは殊に然りで、実に俗悪極まる芝居にさへ競うて行き、彼是の妄評をする。これが親なり姉なりだけなら可いが、芝居は観るべからずと禁止を学校から受けて居る児童の面前でも敢てするばかりか、禁止を破つても我関せずとして児童を携帯して観劇に赴き一夜を娯しむる類は尠くない。かの芝居小屋で親姉姉なりに伴はれて観劇する児童の多いは、苦々しい感を起さしむる次第で、其の他小説の如きは或は講談（単行本）の如きに^マがられて、児童の聞知すべからざる恋愛さへも敢てその面前でするに至つては、実に寒心に堪へざるを得ないばかりか、学校当局者の苦心の効果も大にこれが為めに削減せられて仕舞ふことになる。これは本島在住の母国人の低趣味が家庭に及ぼす悪弊の一端である。この所謂いかもの喰ひの連中はこれは論ずるまでもないことだ／畢竟ずるにお伽事業なるものは、この風潮を改善すべき手段として、児童の趣味と向上せしむるのが目的である。

「内地」においては、巖谷小波などを中心に「お伽事業」が実施され、その影響で都会においては三越や大丸、白木屋等のデパートが子供向けの事業を展開しつつあり、子供の日等を日曜日ごとに設けて少年少女のサービスに勉めていた。それによって「内地」児童の情操教育は向上した。しかし、台湾においては、大人と子供の楽しみはそれぞれ分離されておらず、子供に悪影響を及ぼしており、「お伽事業」こそこの風潮を改善できるとしている。それなのに、大人たちはなぜ子供たちの「趣味向上」に興味を示さないのかと言えば、以下のような理由があったからだ。

由来台湾の天地に活動せる人より、平々凡々たる徒輩に至るまで、まづ出稼と云ふ形である。少年少女の趣味向上などいふよりは、出でへは権勢に媚び入つては寝酒に酔ふか、さもなくば俗悪の興業物に一夕の快を貪ふるの徒輩が多いのである。只幾年間現地位に満足し粘着して、多少の蓄財を得て故山に帰らんとする心底、非物質的のこのお伽事業など勃興……いや発芽さへまだ見ないのは、一面に於てかくある為で、殖民地に在住者の低趣味は察し得られるであらう。かゝる人の家庭にある児童を、日毎々々教導せらるゝ学校当事者の労苦や、真に同情多謝すべきである。あゝ新領土の育英事業亦た至難なるかなだ。(同前引用文)

すでに游珮芸も指摘しているように、台湾に来る「内地人」のその多くは、台湾に永住する人々ではなく、この新領土で数年間、その現況に満足し小金を貯めて（「内地人」役人なら「外地」台湾においては六割の加俸があった）「内地」に帰ろうとする出稼ぎ的思考の者が多かった。故に子供に対する家庭教育にも、また社会教育つまり「お伽事業」等に眼を向ける余裕を持ち得なかつたと言えるのである。それでは西岡が再三にわたって言う「高尚なる趣味を児童に涵養せしめ向上せしむる」「お伽事業」とは、具体的にどのようなものであったのか。『台湾教育』第一四二号（大正三年二月一日）において西岡自身が、以下のように説明している。

一体お伽事業なるものは、児童に娯楽を与へしめこれを利用し、快く楽しみつある裡に、学校以外の教育をなし、知識を補足し、趣味の高尚なるものを漸次に取得せしむのが目的なので、このお伽事業なるものが、通俗教育の一つとして、進んだる国の第二国民の教育上緊要視されるのは、実にこの点にある。(中略)まづ第一がお伽噺やお伽劇の脚本の著作、第二はお伽噺の口演、第三はお伽劇の試演である。そしてこの以外には手品がある。これをお伽手品とかお伽奇術とかいつて、お伽丸柳一がやつては喝采を博して居るのだ。其の他活動写真にもあるけれども、これは寧ろ副産物であつて、自分はお伽事業にはこの二種は入れたくないのである。

（「所謂お伽事業に就いて—お伽—お伽噺—お伽口演—お伽劇—」）

以上から、西岡英夫における「お伽事業」の範囲が明確に判る。お伽噺やお伽劇の脚本を書くこと、お伽噺の口演、お伽劇の試演という三点にしぼって「お伽事業」と言ったのである。このように西岡は「お伽事業」の普及を決意し、その後も『台湾教育』に「通俗教育より観たる蓄音機と活動写真」（第一五〇号）や「お伽噺の選択と資料」（第一五一号）等を発表した。台湾においては児童文芸の基礎的な要件も未だ成立していないこともあり、また文芸の世界では無名の西岡英夫が、以上のように呼びかけても表面的な反応はまったくなかったようである。そのためか翌大正四年（一九一五）には西岡の「お伽事業」に関する論考や主張は『台湾教育』にまったく発表されず、『台湾時報』や『台法月報』等に台湾についての随筆類や英語からの翻訳を掲載しており、台湾における「お伽事業」が頓挫したかのような印象を与える。

ところが、大正五年になると「お伽事業」に対する状況が大きく変化する。西岡英夫の縁戚である巖谷小波が來台したのである。

第三章 巖谷小波の來台と「お伽事業」

大正四年（一九一五）七月、日本統治期最後の大規模武力抵抗だった西来庵事件が決着した。その翌大正五年二月二五日、「内地」でも著名なお伽作家でお伽噺口演の大家・巖谷小波（一八七〇～一九三三）が初めて台湾を訪れた^⑩。「内地」の著名文芸家の來台は、台湾到着以前から話題となり、『台湾日日新報』をはじめとする有力紙は連日巖谷小波の動向を報道した。小波は今回の來台は、台湾各地でお伽噺の口演をするためであった。三月一三日の「内地」帰還までに、台北・基隆・淡水・台中・鹿港・彰化・嘉義・台南・阿緞・打狗（高雄）の小学校・公学校・父兄会・愛国婦人会・医学校・各会社家族会等で口演し、約三万人の聴衆を集めたといわれる。台北以外の地には縁戚である西岡英夫が台北帰着の一一日まで同行している。尚、小波は帰国後、この台湾行きを「台湾舌栗毛日記」（五月、博文館『少年世界』第二二巻第五号）、「台湾土産噺」（六月～九月、『少年世界』第二二巻六号～九号）として発表している。

さて、小波が具体的にどのような場所で口演をしたのか、いま游珮芸「巖谷小波の台湾行脚」（『植民地台湾の児童文学』第一章）に付録された「表2 巖谷小波の一回目訪台の日程」から一部ではあるが抽出してみよう（以下、「表」と略称）。尚、この「表」は上記「台湾舌栗毛日記」に基づき作成したとある。

二六日：城南小学校では台北父兄会のために口演。高等女学校では台湾教育会のために講演。専売局家族会のためにお伽噺を口演。

二七日：台北お伽会発会式に臨み、お伽噺を口演。この口演には市内の小学校五年以上の生徒約百名が集まる。

二八日：二九日：（省略）

三月一日：郊外の農事試験所に赴き、講習生約二百名（台湾人）を前に口演。

二日：医学校に出演、此処の生徒約二百名皆台湾人。城西小学校に市内各学校四年以上の生徒約千名に口演。

三日：大稲埕公学校および女子部で各一回ずつ口演。艋舺の国語学校附属公学校で口演、次いで同高等女学校に出演、約二百人の台湾人の少女を対象に口演。

（以下、省略）

以上、一部を抽出しただけではあるが、今回の巖谷小波の口演は、子供たちのためだけでなく、「台北父兄会」「台湾教育会」「専売局家族会」等大人のための口演も含まれていた。この外にも「通信局の吏員会」「監獄署員の家族会」等等にも口演をしている。これは子供のための「お伽事業」の発展は、大人の理解があってこそ推進できるものだ、という認識が小波自身にあったことをうかがわせる。そして、その大人たちを一元化して「お伽事業」に向かわせる組織が、小波來台の僅か三日目の二月二七日に成立するのである。「台湾お伽会」の発足である。『台日日新報』大正五年二月二七・八日の「お伽会発足式」には、巖谷小波の來台を機会に、台北父母会の集会で小波立会の下「本島在住の児童の為め娯楽の裏に智徳を涵養する目的を以て随時訓育娯楽に関する事業を行ふ為め学事係者及び児童父兄等の有志を会員」とするとある（尚、「台湾お伽会」は後に「台北童話会」に改称する）。「台湾お伽会」の幹事は西岡英夫である。そして、巖谷小波の來台口演と「台湾お伽会」の発足を転機に、西岡英夫の「お伽事業」も次第に認知を受けることになるのである。また、今回の來台に際して、小波は西岡に向かってある提案をしている。それは西岡もお伽噺口演をする

ようにとの提案であった。

自画自賛で恐れ入るが、十余年前初めて台湾の土を踏んだ私は、童話普及が我使命とする仕事の一つと考へ、まだ童話の童の字も、人の口に上らなかつたので、私がこれを唱道した。殊に今日の盛を致したのは、台湾の文化の進展に伴ふ結果は無論だが、小波先生が来台された一事が、一層強い刺戟となつたのは誰しも認めるところである。私が今日臆面も無く童話普及の為め口演をするに至つたのは、小波先生が「君も一つやり給へ」と慫慂されたに因り、決心して出発したもので、全く今日の如く台湾の児童、内地人児童は勿論本島人即ち台湾人の児童が、童話を聞き童話を読み得るの幸福を享くるに至つたのは、小波先生の来台が一大因をなしたもので、この意味からして、小波先生を徳とするのである⑩。

巖谷小波が西岡に向かって、なぜこのような提案をしたかといえば、それには然るべき理由があった。今一度「表」を見ると、三月一日には農事試験所に行き、講習生約二百名に口演。講習生は台湾人である。二日は医学校で講演。生徒はすべて台湾人。三日は大稲埕公学校および女子部で口演。艦舳の国語学校附属公学校で口演し、同高等女学校にでも、約二百人の台湾人の少女に口演をしている。この外にも台北以外の地の多くの公学校で台湾人の生徒に口演しているのである。前章で述べたように、資料で見る限り西岡英夫の「お伽事業」は、在台日本人向けの事業であった。ところが、誰の企画かは判らないが、巖谷小波のお伽噺口演の相手は在台日本人の大人や子供の外に多くの台湾人生徒でもあったのだ。前述したように当時の台湾人の日本語理解者率は極めて低く、おそらく総督府は巖谷小波の来台を機に、お伽噺を聞かせて理解者率上昇の一助としたのかも知れない。それはさておき、台湾人相手の口演について、巖谷小波は西岡塘翠に、次のように語ったと言う。

(小波) 翁が最初の渡台に、公学校で台湾人児童への口演は今日の如くその当時、国語普及も国語教授の研究も不十分であつたか、翁が童話を聴いた公学校の生徒は、何れも各校四学年以上で、まづ大抵の国語は判るのだ。如何も小学校での口演のやうには行かず、翁もこの公学校での口演は、さすがに困られたもので、どうもぴんと来ない。反響がびつたりしない。それで翁は苦笑しながら「どうも公学校で口演する、自動車で御葬式に行くやうな工合で甚だ閉口するする」と、よく公学校へ口演に行かれる際に洩された。自動車で行く御葬式に行くの譬喩は一寸面白い。満洲でも朝鮮でも、その土地の児童に国語で口演されたらうが、台湾人の児童に口演されるのとは、大分趣きが異なると云はれ「だから台湾に居る君達は、この点を注意しなければ失敗するよ、内地から押かけて来たものは、誰でもうまく出来るものぢやない。そこで台湾は君達の領分さ、大に努力すべきだね……」と、教へられたのである。

(「台湾に於ける小波先生 (一)」『童話研究』第一五巻第五号 昭和一〇年一〇月一日)

巖谷小波は、おそらく「内地」でおこなっているのと同様のお伽噺口演を、在台日本人の小学生や公学校の台湾人生徒にもおこなつたのだろう。しかし、引用のように日本語理解者率の低い公学校での口演にはやはり違和感を覚えたのであろう。小波が西岡に対して台湾でのお伽噺口演を「君も一つやり給へ」と慫慂したのは、もちろん台湾在住のお伽噺口演家がいなかったことに起因すると思うのだが、

ここで小波が言う「台湾は君達の領分さ、大に努力すべきだね」とは、台湾人聴取者の日本語理解度に応じて、口演の難易を自在に替えることができる力量をもった口演家が台湾には必要だ、と言っているのであった。それが「君も一つやり給へ」の真意だったと思う。それは台湾における「お伽事業」の普及と推進を使命とした西岡英夫には、最適なアドバイスでもあった。これ以降、西岡は公学校の生徒も視野に入れて、また台湾の歴史や各民族の伝説を基に「お伽事業」を推進するようになった。

巖谷小波の來台、そして「内地」への帰還以降、その影響の下に台湾社会も次第に「通俗教育」としての「お伽事業」に注意するようになり、また西岡英夫もお伽噺口演に様々な面で苦心するようになって、次第に台湾の「お伽事業」（児童文学）の中樞を担うような存在になっていくのである。従って、大正五年の巖谷小波の來台口演は、台湾、そして西岡英夫の「お伽事業」として画期的な影響を与えた出来事だったと言ってよいだろう。

第四章 「お伽噺」から「童話」そして「児童文学」

巖谷小波が「内地」に帰って以後、西岡英夫は徐々にその頭角を現す。

記録には残っていないが、西岡は小波の徳憑を守ってお伽噺の口演を頻繁に行っていたようである。その口演経験の集大成が昭和五年（一九三〇）一月一日の雑誌『第一教育』（台湾子供世界社発行）第九卷第一号から三九回（第一三卷第二号、昭和九年二月二八日）に渡って連載される「話術に関する一考察」である。「話術の三要件と心の態度」「聴衆の研究と理解が肝要」「話術の方法と話者の態度」「寓話伝説神話及びその他」「話者の注意すべき聴衆者」「話術必要な音声と言葉遣」「話に大切な音声の応用」「音声の練習と其保護法」「話術の上に必要なる語法」「出演当日と登壇前後」等等、微細を穿っての説明は、小波の徳憑をしっかりと守り、長年に渡って自ら口演に様々な工夫を凝らしてきたことが判る。

大正六年（一九一七）三月一三日、西岡は画期的な出版をする。西岡英夫編著『科外読本 台湾れきし噺』（総ルビ、台湾日日新報社）である。台湾において、これ以前に台湾の歴史と銘打った書物は皆無だったし、ましてや子供用の歴史語り等も皆無であった（本格的通史である連横の『台湾通史』三巻が完成するのが、大正一〇年<一九二一>のことである）。「巻頭に」には、次のように子供たちに向けて歴史の必要性を説いている。

～共に未来の大国民たる少年少女の対手となり、善良な国民とする我等子供党は、口に筆に、この使命を尽す為めに微力を致さねばならぬと思ひます。それで編著者は口演に著作に少年少女の為に適当なものと絶えず心掛けて居ました。（中略）一国一家、昔から伝はる歴史のないところはありません、六百年も経つた台湾には亦た伝へ知るべき歴史があり、忘れてはならぬ事蹟が多いのです。誰でもこの島国に住む人々は台湾の歴史を知らないで可いでせうか。ましてや、未来は大国民として、台湾の天地に活動をせねばならぬ少年少女は、一通りの台湾の歴史を知り、忘れてはならぬ事蹟を語り得ないではありませんと思ひ、それで、少年少女が読んで判るやうに、台湾の歴史を書いて試やうと、この「台湾れきし噺」を編著しました。

（総ルビだが省略したので、送り仮名におかしなところがある）

この『台湾れきし噺』は、「(一) 幸福多き台湾人と歴史、(二) 和蘭の昔を語る赤嵌楼、(三)

勇胆なりし濱田弥兵衛、(四) 台湾を占領した鄭成功、(五) 忠君愛国の孤臣鄭成功、(六) 内乱多き台湾の清時代、(七) 朱衣を着た俠通事吳鳳、(八) 明治七年の牡丹社征伐、(九) 割讓された当時の台湾、(一〇) 護国の神北白川宮殿下、(一一) 尊い芝山巖の六士先生、(一二) 台湾の繁栄を示す高塔」という内容で、それは日本人の眼から見た台湾の歴史となっており、それも個別の物語を時代順に並べてみたと言う程度のものであった。しかし、このような子供用歴史語りは台湾では初めてのものだったので、人々の興味を引き起こし、僅か一日足らずで第五版(三月二二日)が出版された。

『台湾れきし噺』を出版したその年の八月二〇日、西岡は高砂読書会(実体は不明)において「童話の研究に就いて」という発表をする。その発表内容は、同年九月一日の『台湾教育』第一八三号に掲載されている。この一文の趣旨は、童話と児童心理についての概要であるが、日本の昔話からグリムやアンデルセン、イソップやクルイロフ(ロシアの詩人)、『ロビンソン漂流記』『小公女』『アンクルトムスケピン』、そして北欧神話やギリシャ神話、アラビア夜話等までも読破しているようで、その当時の在台北口演家として広い知識を持っていたといえよう。中でも注目に値するのは、次の一節である。

～けれども実際のところ、お伽噺(Fairy tale)とこの童話との区別は難しいもので、今日まで厳密に両者の区別を云つたものはありません。或は童話は教育的にお伽噺は世俗的に称するものだと云ひ或は神話的の起源を有するものをお伽噺即ちFairy taleだと云ふのだともいひますけれども、今日のところではまづ両者を区別しないで、同一物と見做す方が穏当でないかと思ひます。童話なりお伽噺なり即ちNursery taleなりFairy taleなり何れも純粹の童話であります、(中略)次に童話と小説との中間をゆく少年小説とかお伽小説とか少女小説とかの類が、当今に読まれつある少年少女の読物、それから童話ではないが性質が童話的なもので屢々童話として用ひられて居る伝説や神話の如きもので、これを総称して児童文学(Juvenile Literature)と云ひます。

西岡英夫のこの文章が、管見ではあるが台湾において今日的な意味で初めて「童話」及び「児童文学」という言葉を使用した最初であろうと思われる。もちろん「内地」には古くから「童話」という言葉はあったが、それは「昔話」の言い換え語であり、ここでいう「童話」の意味とは異なっていた(台湾でも大正三年二月の『台湾教育』第一四二号に「虎姑婆(台湾童話)」と見えるが、これも「台湾昔話」の意味である)。現代の児童文学研究者から見れば、稚拙で簡単な分析でしかないかも知れないが、巖谷小波が創出した「お伽噺」をも含めて「童話」という言葉で子供の文芸を代表させたのは、台湾では西岡が最初であろう。「内地」において「お伽噺」に代わって「童話」という言葉の使用が定着するのは、後の大正七年七月、鈴木三重吉主宰の『赤い鳥』創刊以降のことであることから察しても早いといえるだろう。「内地」において、その「童話」が「児童文学」という用語に変わるのが、昭和初期である(昭和六年<一九三一>七月に季刊雑誌『児童文学』が創刊され、短期間文教書院から発行された)。ここで使用されている「児童文学」の意味を、童話と小説の中間及び伝説や神話の総称だとしているは、「児童文学」という用語への大正期の西岡英夫の捉え方なのであろう。当時としては極めて新鮮な響きがあったに違いない。

上記の引用文に「少年少女の読物」という言葉が出て来るが、大正八年には西岡自身

も「少女小説」を執筆している。吉川精馬という人が台湾子供世界社を創立し、大正六年（一九一七）四月に台湾初の子供向け雑誌月刊『子供世界』が創刊された^⑫。該誌は所蔵する図書館等がなく、内容は不明である。西岡英夫がこの雑誌に寄稿している可能性もある。その吉川精馬が、大正八年一月に小公学校高学年向きに月刊誌『学友』を発刊した。西岡は四月から「少女小説」を寄稿している。小説の題名は「少女小説 尊き記念品」で三回の連載であった。内容は少女同士の友情を描いた小説で、その友情の象徴が学校の記念品となるという、現在から見るならばたわいのない物語なのだが、よく考えるならば「少女小説」とはなっているが、台湾の小説としては最も古いものに属すると思われる。なぜならば、現在の台湾近代文学史上で最も古い近代小説は、従来は大正十一年（一九二二）七月から一〇月にかけて雑誌『台湾』に四回に渡って連載された追風（謝春木）の「彼女は何処へ？」（日本語）か、陳萬益によると同年四月に『台湾文化叢書第一号』中の鷗の「可怕的沈黙」（中国語）だと言われている^⑬。西岡の小説はその出来不出来及び「少女小説」だということを除けば三年以上も早く発表されているのだ。そして台湾では一般の文学よりは児童文学のほうが、近代文学として先に成立していたのだ、ということ向西岡英夫のこれらの作品は教えてくれる^⑭。

以上のように、大正五年以来、西岡英夫は台湾の地において児童文学の興隆に向けて孤軍奮闘してきた。その甲斐あって大正一〇年頃には、児童の読み物が新聞雑誌に掲載され、幼年少女の絵雑誌や少年少女雑誌も家庭で歓迎を受けるようになり、総督府図書館には児童室が設けられ、児童の閲覧者が増加するという具合であった。そして、今までの経験と理論を注ぎ込んで書いた台湾童話の分析が「童話を通じて観たる台湾」（『台湾教育』第二四五～二四七号 大正十一年一〇月～一二月）の発表で、西岡英夫の台湾童話研究も頂点を迎えるのである。そして、この頃西岡に東京の世界童話刊行会から同会が刊行する「世界童話大系」第一五巻に収録する「台湾編」の編集依頼が来たのである。「世界童話大系」（日本語訳）とは、世界の童話の集大成で全二三巻、A5版の精装本で各巻平均七百頁という大冊で、戦前期の童話関係では空前の出版であった。先の単行本『台湾れきし噺』は、台湾島内だけのことであったが、この度は西岡の台湾童話研究の成果が「内地」でも認められたということになる。西岡は「台湾童話集」二六篇と「生蕃童話集」七篇をまとめて掲載した。該書は昭和二年三月に出版され^⑮、西岡英夫の児童文学に関する活動は、その前期を終えるのである。

最後に、巖谷小波来台・帰還以降の台湾社会での「お伽事業」実施について見ておこう。ただし、その様子を語るのは、やはり西岡英夫である。

一体、共進会や博覧会などと云つたものは、実際の目学問をするに利益があるので広い意味から云ふ通俗教育の資料なのである。（中略）次に協賛会の余興として演芸館で開演した、東儀石川一座のお伽劇と家庭劇も、確に児童及び家庭の為には好個の娯楽物であつて、名ばかり聞き知つて、その実体を知らぬ本島児童の為には、このお伽劇が如何に歓迎されたかは、その所演当日の観劇児童の、嬉々として笑顔を造つて楽しく見物して居る様で、証拠立てることが出来る。健全で清新でなければ児童は勿論家庭の人々が団欒の下には芝居は愚か活動写真も見物を禁ぜねばならぬ。この意味からして我が台湾には、真面目な上品な家庭の人々のためにも、児童の為にも、一つの娯楽機関さへ備つて居ないのである。恰も共進会の開催が機となつて、この欠陥を補つた

ことは我等の大いに意を強くするものである。従つて一面にはこれ等の事業が本島にも必要であることを、識者の脳裡に印せしむるものがあつたらしいと思ふと、これも効果の一つとして記さねばなるまい。

(「通俗教育の立場より」『台湾教育』第一六八号 大正五年六月一日) ⑬

ここで言う「共進会」とは、「台湾勸業共進会」のことで始政二〇周年記念行事として大正五年四月一〇日から五月一五日まで、台湾総督府の主催で台北で開催された。会場は第一会場として総督府新築庁舎（現在の台湾総統府）、第二会場として総督府林業試験場台北苗圃が設けられ、台湾における過去二〇年間の産業発展の成果を内外に示すために、台湾の生産品の展示が行われ、また「支那及南洋館」「機械館」「蕃俗館」等があった。その中に余興として共進会の実施母体である協賛会が行ったのが「支那劇大合同団」「台北検番芸妓舞踊」「中野連鎖劇」「天勝一行の奇術」と並んで「御伽噺と家庭劇」が四月二〇日から二九日まで演ぜられたのである。余興ではあるにしろ総督府も通俗教育（社会教育）の一環として子供とその家庭に眼を向け始めたといえよう。ここにもおそらく巖谷小波来台の影響があったと想像できる。そして、西岡英夫は「東儀石川一座のお伽劇と家庭劇も、確に児童及び家庭の為には好個の娯楽物であつて、名ばかり聞き知つて、その実体を知らぬ本島児童の為には、このお伽劇が如何に歓迎されたかは、その所演当日の観劇児童の、嬉々として笑顔を造つて楽しく見物して居る様で、証拠立てることが出来る」との感慨と共に、その後半生は児童劇とラジオ放送に邁進していくのである。

【注】

①：おそらく明治末期から大正二、三年に発表されたと推測されるこれらの作品は、未だ発表紙誌も現物も確認できていない。

②：昭和一五年の第一三版にも「西岡英夫」の名が見えるが、記述は若干異なっている。

③：それらによってまとめたのが、大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』第二巻（大日本図書株式会社発行、一九九三年一〇月三十一日）中の上田信道執筆「西岡 英夫 にしおか ひでお」であり、次のように記す。「一八七九（明12）年一月四日～没年不明。実業家、口承文芸研究家。東京生まれ。早稲田大学政経科卒。塘翠と号す。報知新聞などを経て台湾銀行、台湾煉瓦など台湾の実業界で活躍。傍ら台湾に住む漢民族や少数民族の風習・伝承に興味を持ち、民俗学的立場からの研究を行う。著書に『世界童話大系15』（二七）中の「台湾童話集」など。「教育行童話研究」などにも執筆した。また、口演童話家としても活動。台湾における童話運動の開拓者と言われた。」

④：游珮芸『植民地台湾の児童文学』（明石書店 一九九九年二月）「第Ⅱ部 台湾在住＜内地人＞による児童文学運動」の第二章。尚、該書は日本統治期の児童文学の台湾での発展を、主に在日日本人を中心に解き明かした研究書。この分野では最初のものである。

⑤：「白百合（女子大学）児童文化研究センター叢書」として慶應義塾大学出版株式会社から刊行された（一九九八年三月二十日）。

⑥：この段落の記述は、次の資料に拠る。

西岡塘翠「小波先生と私」（日本童話協会『童話研究』第九巻第一〇号、昭和五年一〇

月五日) / 西岡英夫「名家感想集」(木村定次郎<小舟>編輯発行『還暦記念 小波先生』昭和五年一月一八日) / 塘翠西岡英夫「懐しの名尾上新兵衛君」(家の教育社『いぬほりこ』昭和十一年一月七日) / 巖谷大四『波の跫音--巖谷小波伝』(新潮社 昭和四九年一月一〇日)

⑦: 本文前出、西川満『黄金の人』に拠る。尚、西川満がこの小説執筆時期には、まだ後宮信太郎は健在であり、不明箇所は聞き書きして正確を期した、という。また余談ではあるが、後宮家の隣に住んでいた菊田一夫は、戦後に「君の名は」でその姓を使用して主人公を「後宮春樹」とした。

⑧: 大正二年(一九一三年)六月一日発行の西岡英夫「生蕃人の舞踊と其の史的研究(文学博士久米邦武氏所説)」(台湾教育会『台湾教育』第一三四号)に「法務部勤務」とある。

⑨: 藤井省三『現代中国文化探検--四つの都市の物語』「第四章 台北」(岩波新書一九九九年一月、一九三頁)

⑩: 巖谷小波の渡台口演については、游珮芸「巖谷小波の台湾行脚」(『植民地台湾の児童文学』第一章)に詳しい。

⑪: 西岡英夫「名家感想集」(木村定次郎<小舟>編集発行『小波先生』昭和五年一月一八日)

⑫: 注④に引く游珮芸の著書の第Ⅱ部第三章に「吉川精馬と児童雑誌『学友』」があり、『子供世界』について「現時点での文献調査の結果、この雑誌が植民地台湾における最初の子ども向けの雑誌のようである。現物が図書館等に所蔵されていないため、内容の詳細は不明である。当初は小公学校の全児童向けだったが、一九一九年一月からは四年生以上の小公学生向けの姉妹誌『学友』が発刊されたため、それ以降は、低学年向けの雑誌として発行されたようである。ところが、同年十二月に『学友』が『婦人と家庭』と改題されたため、『学友』の読者を吸収する形で再出発した。」とある。

⑬: 陳萬益『于無声処聽驚雷』(台南市立文化中心 一九九六年五月)

⑭: この外に七月からは「少女小説 人ちがひ」を四回に渡って連載している。尚、未完に終わったが、一般小説としてこの年の一二月一日から「椰子の葉蔭(長編小説)」を『学友』の改題誌『婦人と家庭』第一号に発表している。しかし、いずれにしる日本人の創作は「台湾文学史」の範疇に入らないというのが台湾人文学研究者の考えのようだ。

⑮: 日本児童文学学会編『児童文学事典』には「その後、構成と判型を変えたその普及版が近代社から『世界童話全集』として刊行されたが、三一年誠文堂(編集者、松元竹二)から『世界童話大系普及版』として構成を変えて出版されている」(宍戸寛)とある。尚、筆者が見たものとして「世界童話大系普及版 日本童話集下巻」(編輯者 松元竹二、発行者 小川良雄、発行所 金正堂、昭和九年一月二十日発行<昭和十三年五月一日十版発行>)という版もある。

⑯: この外に西岡英夫が台湾勸業共進会を全体的に扱ったものに「台湾勸業共進会印象記(上)(下)」(『台湾時報』第八一・八三号、六月一五日・八月一五日)がある。尚、「台湾勸業共進会」については、山路勝彦『近代日本の殖民地博覧会』(風響社 二〇〇八年一月二五日)を参考にした。

【付録】西岡英夫著作目録（稿）

■【一九〇六年】（明治三九年）

一月二四日、西岡英夫『立身と繁昌』（東京市京橋区南紺屋町十二番地 実業之日本社）

一月、西岡英夫『商人と文章』（実業之日本社）

■【一九〇七年】（明治四〇年）

七月一日、西岡英夫「世界の海流」（博文館『少年世界』第一三卷第九号）

九月五日、西岡英夫『商賈と勘定』（実業之日本社）

■【一九〇八年】（明治四一年）

二月一日、西岡英夫「五稜郭」（『少年世界』第一四卷第二号）

■【一九〇九年】（明治四二年）

六月一日、西岡英夫「北海の大公園（大沼、小沼、駒ヶ嶽）」（『少年世界』第一五卷第八号）

■【一九一〇年】（明治四三年）

●この頃、台湾児童文学の勃興に尽力した西岡英夫が来台した。

一月一日、西岡英夫「基隆の半時間」（法院月報発行所『法院月報』第四卷第一号）

二月一〇日、西岡英夫「公業の研究に就て」（『法院月報』第四卷第二号）

三月一〇日、西岡英夫「艋舺街頭の午前」（『法院月報』第四卷第三号）

四月一〇日、西岡英夫「大稻埕の後半日」（『法院月報』第四卷第四号）

五月一〇日、西岡英夫「桃園街頭の初更」（『法院月報』第四卷第五号）

六月一〇日、西岡英夫「竹風蘭雨の新竹街」（『法院月報』第四卷第六号）

七月一〇日、西岡英夫「廢庁後の苗栗街」（『法院月報』第四卷第七号）

八月一〇日、塘翠生「一瞥の台中街」（『法院月報』第四卷第八号）

八月一〇日、西岡英夫「殖民政策と同化主義」（『法院月報』第四卷第八号）

九月一〇日、西岡英夫「湾式現存の彰化街」（『法院月報』第四卷第九号）

九月一〇日、塘翠生「台北通信」（『法院月報』第四卷第九号）

一〇月一〇日、塘翠生「別天地の鹿港街」（『法院月報』第四卷第一〇号）

一〇月一〇日、西岡英夫「外人は意外に台湾を了解す」（『法院月報』第四卷第一〇号）

一〇月一〇日、西岡英夫「台湾の半面」（『法院月報』第四卷第一〇号）

一二月一〇日、西岡英夫「台湾土人の海洋観」（『法院月報』第四卷第一二号）

■【一九一一年】（明治四四年）

一月二三日、西岡英夫「台北城東偉観」（台法月報発行所『台法月報』第五卷第一号）

二月二日、西岡英夫「門聯小観」（『台法月報』第五卷第二号）

三月二三日、西岡英夫「竹藪小観」（『台法月報』第五卷第三号）

三月二三日、塘翠生「南台湾一瞥通信」（『台法月報』第五卷第三号）

四月二〇日、西岡英夫「水牛小観」（『台法月報』第五卷第四号）

四月二〇日、塘翠生「南台湾一瞥通信」（『台法月報』第五卷第四号）

五月二〇日、塘翠生「南台湾一瞥通信」（『台法月報』第五卷第五号）

六月二日、塘翠生「南台湾一瞥通信」（『台法月報』第五卷第六号）

七月二三日、塘翠生「南台湾一瞥通信」（『台法月報』第五卷第七号）

■【一九一三年】（大正二年）

五月一日、西岡英夫「台湾の端午節（種々様々な魔除け行事）」（『少年世界』第一九卷第七号）

六月一日、法務部勤務 西岡英夫「生蕃人の舞踊と其の史的研究(文学博士久米邦武氏所説)」(台湾教育会『台湾教育』第一三四号)

一二月一日、西岡英夫「奇妙な台湾の土俗」(『少年世界』第一九卷第一五号)

■【一九一四年】(大正三年)

一月一日、西岡英夫(塘翠)「お伽事業の本島普及に対する希望」(台湾教育会『台湾教育』第一四一号)

一月二〇日、塘翠小史「奇なる埔里社の正月」(『台法月報』第八卷第一号)

二月一日、西岡英夫(塘翠)「所謂お伽事業に就いて-お伽-お伽噺-お伽口演-お伽劇」(『台湾教育』第一四二号)

四月一日、西岡英夫(塘翠)「お伽事業に対する用意と覚悟」(『台湾教育』第一四四号)

一〇月一日、西岡英夫「通俗教育より観たる蓄音機と活動写真(音譜と映画との改良選択問題)」(『台湾教育』第一五〇号)

一〇月一五日、塘翠生「戦乱と台湾人」(東洋協会台湾支部『台湾時報』第六一号)

一十一月一日、西岡英夫(塘翠)「お伽噺の選択と資料」(『台湾教育』第一五一号)

一十一月二〇日、塘翠生「台湾に於ける迷信の利用と反乱」(『台湾時報』第六二号)

一二月一日、西岡英夫「趣味の回顧」(『台湾教育』第一五二号)

■【一九一五年】(大正四年)

一月一日、西岡英夫「お正月の行事」(『台湾教育』第一五三号)

一月二〇日、塘翠生「台湾の兔いろいろ」(『台湾時報』第六四号)

四月一五日、英塘翠「台湾に醸造せらるゝ酒」(『台湾時報』第六七号)

五月一五日、英塘翠「台湾に醸造せらるゝ酒(中)」(『台湾時報』第六八号)

七月二二日、英塘翠「台湾に醸造せらるゝ酒(下)」(『台湾時報』第七〇号)

八月一日、英塘翠「台湾の真夏」(『少年世界』第二一卷第八号)

八月二〇日、塘翠生(西村英夫)「台湾の鉱泉」(『台湾時報』第七一号)

一〇月二〇日、西岡英夫訳(米国 ゼームス・エチ・コリンズ著)「米国自動車強盗検挙顛末」(『台法月報』第九卷第一〇号)

一十一月二五日、西岡英夫訳(米国 ゼームス・エチ・コリンズ著)「米国自動車強盗検挙顛末」(『台法月報』第九卷第一一号)

■【一九一六年】(大正五年)

●二月二五日、口演童話の大家・巖谷小波(一八七〇~一九三三)が来台し、口演童話(子供達を集めて童話を聞かせることで、明治期から大正七年頃までは『お伽噺の講演』と言われていた)の行脚をする(二月二五日~三月一三日、台北(三月五日まで滞在)・基隆・淡水・台中・鹿港・彰化・嘉義・台南・阿緞・打狗<高雄>の小学校・公学校・父兄会・愛国婦人会・医学校・各会社家族会等で口演、聴衆は約三万人)。台北以外の地には縁戚である西岡英夫が台北帰着の一日まで同行したようである。小波は帰国後、この台湾行きを「台湾舌栗毛日記」(五月、博文館『少年世界』第二二卷第五号)、「台湾土産噺」(六月~九月、『少年世界』第二二卷六号~九号)として発表した。

●二月二七日、巖谷小波の来台を機会に、台北父母会の集会で小波立ち会いの下「本島在住の児童の為め娯楽の裏に智徳を涵養する目的を以て随時訓育娯楽に関する事業を行ふ為め学事係者及び児童父兄等の有志を会員」とし「台湾お伽会」が発足した。幹事は西岡英夫。(『台

- 日』二月二七・八日「お伽会発足式」尚、「台湾お伽会」は後に「台北童話会」に改名する。
- 三月一日、西岡英夫「本島人中学校の学寮生活」（『台湾教育』第一六六号）
- 五月二〇日、西岡英夫訳（米国 セームス・エッチ・コリンズ著）「米国自動車強盗逮捕顛末」（『台法月報』第一〇卷第五号）
- 六月一日、西岡英夫（台湾お伽会幹事）「通俗教育の立場より」（『台湾教育』第一六八号）
- 六月十五日、西岡英夫「台湾勸業共進会印象記（上）」（『台湾時報』第八一号）
- 七月一日、英塘翠「汀花君!何故死んだ」（『台湾教育』第一六九号）
- 八月一日、西岡英夫「台湾人女学生の寄宿舎生活（艋舺附属女学校の学寮見聞記）」（『台湾教育』第一七〇号）
- 八月十五日、西岡英夫「台湾勸業共進会印象記（下）」（『台湾時報』第八三号）
- 九月十五日、英塘翠「台湾に植ゑられた人柱（尊き犠牲、曰く北白川宮、芝山巖の六士先生及呉鳳）」（『台湾時報』第八四号）
- 一〇月十五日、みどり（塘翠）生「台湾に於けるバナナ」（『台湾時報』第八五号）
- 十一月十五日、西岡英夫「皇室と我台湾」（『台湾時報』第八六号）
- 一二月一日、西岡英夫「大正五年の児童界（通俗教育より観たる回顧）」（『台湾教育』第一七四号）
- 一二月十五日、西岡塘翠「大正五年の回顧」（『台湾時報』第八七号）
- 【一九一七年】（大正六年）
- 一月一日、西岡英夫「新春第一声（通俗教育に対する希望一二）」（『台湾教育』第一七五号）
- 一月十五日、塘翠「大正六年と日本人の使命（はがき寄稿）」（『台湾時報』第八八号）
- 一月十五日、西岡英夫「台湾の珍奇物」（『台湾時報』第八八号）
- 二月十五日、西岡英夫「台湾の珍奇物（泥火山）」（『台湾時報』第八九号）
- 三月一三日（三月二二日第五版）、西岡英夫編著『科外読本 台湾れきし噺』（台湾日日新報社）
- 【内容】（一）幸福多き台湾人と歴史／（二）和蘭の昔を語る赤嵌楼／（三）勇胆なりし濱田弥兵衛／（四）台湾を占領した鄭成功／（五）忠君愛国の孤臣鄭成功／（六）内乱多き台湾の清時代／（七）朱衣を着た俠通事呉鳳／（八）明治七年の牡丹社征伐／（九）割譲された当時の台湾／（一〇）護国の神北白川宮殿下／（一一）尊い芝山巖の六士先生／（一二）台湾の繁栄を示す高塔
- 三月十五日、西岡英夫「台湾の珍奇物」（『台湾時報』第九〇号）
- 三月二〇日、塘翠生「雨の蘭陽行」（『台法月報』第一一巻第三号）
- 四月二五日、塘翠生「蘭陽瞥見録（上）」（『台湾時報』第九一号）
- 五月二五日、塘翠生「蘭陽瞥見録（下）」（『台湾時報』第九二号）
- 六月十五日、塘翠生「台湾の珍奇物」（『台湾時報』第九三号）
- 七月二五日、塘翠生「夏と島（涼を趁ふ台湾の海島観）」（『台湾時報』第九四号）
- 九月一日、西岡英夫「童話の研究に就いて」（『台湾教育』第一八三号）
- 上記の研究は、八月二〇日に「高砂読書会」で発表したものである。
- 九月十五日、塘翠生「台湾の苦力」（『台湾時報』第九七号）
- 一〇月二〇日、西岡塘翠「活動写真に就て」（台湾警察協会『台湾警察協会雑誌』第五号）
- 【一九一九年】（大正八年）
- 一月、英塘翠「対話 春の海」（『学友』第一号）

四月、英塘翠「少女小説 尊き記念品 上」(『学友』第四号)
 五月、英塘翠「少女小説 尊き記念品 中」(『学友』第五号)
 六月、たうすゐ「少女小説 尊き記念品 下」(『学友』第六号)
 七月、英塘翠「少女小説 人ちがひ 一」(『学友』第七号)
 八月、英塘翠「少女小説 人ちがひ 二」(『学友』第八号)
 九月、英塘翠「少女小説 人ちがひ 三」(『学友』第九号)
 一一月、英塘翠「少年(ママ)小説 人ちがひ 四」(『学友』第一一号)
 一二月一日、西岡塘翠「椰子の葉蔭(長編小説)」(『婦人と家庭』第一卷第一号)

■【一九二〇年】(大正九年)

一月一日、西岡塘翠「椰子の葉蔭(長編小説)」(『婦人と家庭』第二卷第一号)
 二月一日、西岡塘翠「椰子の葉蔭(長編小説)」(『婦人と家庭』第二卷第二号)
 五月一日、西岡塘翠「家庭雑話 小父さんが申(まをし)ます(一)」(『婦人と家庭』第二卷第五号)
 六月一日、西岡塘翠「家庭雑話 小父さんが申(まをし)ます(二)」(『婦人と家庭』第二卷第六号)
 八月一日、西岡塘翠「家庭雑話 小父さんが申(まをし)ます(三)」(『婦人と家庭』第二卷第七号)
 九月一日、西岡塘翠「家庭雑話 小供の悪戯」(『婦人と家庭』第二卷第八号)
 一一月一日、英塘翠「残花一輪」(『婦人と家庭』第二卷第一一号)

■【一九二一年】(大正一〇年)

五月二八日、圃畔学人(西岡英夫)「問題の鳥『ヤツプ』鳥と司法事務」(『台法月報』第一五卷第六号)

■【一九二二年】(大正一一年)

一〇月一日、西岡英夫「童話を通じて観たる台湾」(『台湾教育』第二四五号)
 一一月一日、西岡塘翠「童話を通じて観たる台湾」(『台湾教育』第二四六号)
 一二月一日、西岡塘翠「童話を通じて観たる台湾」(『台湾教育』第二四七号)

■【一九二五年】(大正一四年)

●一月一日の『童話研究』第四卷第一号「会報・新入会員」の項に「台北市南門町一ノ一西岡英夫」とある。

●七月一五日発行の『童話研究』第四卷第四号の「個人消息」欄に「西岡英夫氏 生蕃童話集を『世界童話大系』中に執筆の筈」とある。

一二月七日、西岡英夫「芸術童話作家アンデルゼンの事ども」(『台湾教育』第二八二号)

■【一九二六年】(大正一五年／昭和元年)

六月一日、西岡英夫「童話と訓辞に就いての私考」(『台湾教育』第二八八号)

■【一九二七年】(昭和二年)

三月一五日、塘翠「俳句」(台湾総督府内台湾時報発行所『台湾時報』第八八号)

三月一九日、西岡英夫編「台湾童話集／生蕃童話集」(世界童話大系刊行会『世界童話大系 第一五卷 支那』)

【内容】

「台湾童話集」十二支の由来と鼠／虎を欺いた猫の話／劉大人と蝶卵の話／愚息子陳大愚の

話／冬瓜息子と蘆仙人／足なし息子と珍魚／甦つた花嫁と盗人／生蕃と南洋のお姫様／似たもの夫婦と運／猿になつた我儘娘／鳶と人參とりの爺さん／不思議な十人兄弟／旅商人と川岸の女／嘘つき名人七仔／和尚様と蝦蟇仙人／婆さんに化けた虎／肉片と不動不言女／閻魔様と賊の頭／袁翁の取つた質料／島に居た大男小男／唾に生れた我儘娘／孔子様と子児の問答／魍三と林家の由来／山奥の四人悪僧／李五大人の山東行／蝶に化つた祝英台
「生蕃童話集」 入墨の由来と青蛙／黄金の鯉と鶏の妃／日の男征伐と眼祭／鯨の祖父様と姉妹／女の魂と山の白布／巨人退治と酒壺／魔法杖と巖男竹男

四月一五日、塘翠「俳句」(『台湾時報』 第八九号)

●五月五日発行の『童話研究』第六卷第三号の「童話家名簿」に西岡英夫について「号増(「塘」の誤り)翠、台湾に於ける童話運動の開拓者台湾銀行員たる傍ら口演及び創作に努む。『台湾れきし噺』及び『世界童話大系』中の台湾童話集を執筆せり。現住所台北市南門町一の十」とある。

六月一五日、西岡英夫「征台事件と木戸松菊公」(『台湾時報』 第九一号)

六月一五日、塘翠「俳句」(『台湾時報』 第九一号)

一〇月一五日、塘翠西岡英夫「台湾に於ける民俗研究の提唱(上)」(『台湾時報』 第九五号)

十一月一五日、塘翠西岡英夫「台湾に於ける民俗研究の提唱(下)」(『台湾時報』 第九六号)

十一月一五日、塘翠「俳句」(『台湾時報』 第九六号)

一二月一五日、西岡塘翠「島を彩れる美術の秋(台展素人寸評)」(『台湾時報』 第九七号)

一二月一五日、塘翠「俳句」(『台湾時報』 第九七号)

■【一九二八年】(昭和三年)

一月一五日、西岡塘翠「龍に因める台湾風俗」(『台湾時報』 第九八号)

二月一日、塘翠迂人「紙上寸劇『春なればこそ』」(『台湾警察協会雑誌』 第一二八号)

二月一五日、塘翠「俳句」(『台湾時報』 第九九号)

三月一日、塘翠迂人「台湾講古私考」(『台湾警察協会雑誌』 第一二九号)

三月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬萊物語(一)」(『台湾時報』 第一〇〇号)

三月一五日、塘翠「俳句」(『台湾時報』 第一〇〇号)

四月一日、塘翠迂人「台湾講古私考」(『台湾警察協会雑誌』 第一三〇号)

四月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬萊物語(二)」(『台湾時報』 第一〇一号)

四月一五日、塘翠「俳句」(『台湾時報』 第一〇一号)

五月一日、塘翠迂人「台湾講古私考」(『台湾警察協会雑誌』 第一三一号)

五月一日、西岡英夫「天才童話作家『ハウフ』(上)」(『台湾教育』 第三〇九号)

五月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬萊物語(三)」(『台湾時報』 第一〇二号)

六月一日、塘翠迂人「台湾講古私考」(『台湾警察協会雑誌』 第一三二号)

六月一日、西岡英夫「天才童話作家『ハウフ』(下)」(『台湾教育』 第三一〇号)

六月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬萊物語(四)」(『台湾時報』 第一〇三号)

六月一五日、塘翠「俳句」(『台湾時報』 第一〇三号)

七月一日、塘翠迂人「台湾講古私考」(『台湾警察協会雑誌』 第一三三号)

七月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬萊物語(五)」(『台湾時報』 第一〇四号)

八月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬萊物語(六)」(『台湾時報』 第一〇五号)

八月一五日、塘翠「俳句」(『台湾時報』 第一〇五号)

- 九月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬莱物語（七）」（『台湾時報』第一〇六号）
 九月一五日、塘翠「俳句」（『台湾時報』第一〇六号）
 一〇月一日、塘翠「俳句 石蘭居句屑」（『台湾教育』第三一四号）
 一〇月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬莱物語（八）」（『台湾時報』第一〇七号）
 一〇月一五日、塘翠「俳句」（『台湾時報』第一〇七号）
 十一月一日、塘翠「俳句 石蘭居句屑（二）」（『台湾教育』第三一五号）
 十一月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬莱物語（九）」（『台湾時報』第一〇八号）
 一二月一日、塘翠「俳句 石蘭居句屑（三）」（『台湾教育』第三一六号）
- 【一九二九年】（昭和四年）
- 一月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三一七号）
 一月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬莱物語（一〇）」（『台湾時報』第一一〇号）
 二月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三一八号）
 二月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬莱物語（一一）」（『台湾時報』第一一一号）
 三月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三二〇号）
 四月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三二一号）
 四月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬莱物語（一二）」（『台湾時報』第一一三号）
 四月、西岡英夫「方面委員大会雑記」（『社会事業の友』第五号）
 五月一日、塘翠（西岡英夫）「台北より」（『童話研究』第八卷第三号）
 五月一日、西岡英夫「話術の研究と教育者」（『台湾教育』第三二二号）
 五月一五日、西岡塘翠「台俗百話蓬莱物語（完）」（『台湾時報』第一一四号）
 六月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三二三号）
 七月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三二四号）
 八月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三二五号）
 八月一日、西岡英夫「台湾平埔蕃の史的考察」（『台湾警察協会雑誌』第一四六号）
 九月一日、西岡英夫「台湾平埔蕃の史的考察」（『台湾警察協会雑誌』第一四七号）
 九月一日、西岡英夫「童話『桃太郎』と桃太郎本（一）」（『台湾教育』第三二六号）
 九月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三二六号）
 一〇月一日、西岡英夫「台湾平埔蕃の史的考察」（『台湾警察協会雑誌』第一四八号）
 一〇月一日、西岡英夫「童話『桃太郎』と桃太郎本（二）」（『台湾教育』第三二七号）
 一〇月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三二七号）
 十一月一日、西岡英夫「台湾平埔蕃の史的考察」（『台湾警察協会雑誌』第一四九号）
 十一月一日、西岡英夫「童話『桃太郎』と桃太郎本（三）」（『台湾教育』第三二八号）
 十一月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三二八号）
- 不明『台湾の風俗』
- 【一九三〇年】（昭和五年）
- 一月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三三〇号）
 一月一日、西岡英夫「台湾平埔蕃の史的考察」（台湾警察協会『台湾警察時報』第一号）
 一月一日、西岡英夫「話術に関する一考察」（『第一教育』第九卷第一号）
 一月一五日、西岡英夫「台湾平埔蕃の史的考察（六）」（『台湾警察時報』第二号）
 二月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三三一号）

- 二月七日、西岡英夫「話術に関する一考察（二）」（『第一教育』第九卷第二号）
 二月一五日、西岡英夫「分類械闘と台湾人の民族性」（『台湾警察時報』第四号）
 二月、西岡英夫「東京の初午と田舎の初午」（『社会事業の友』第一五号）
 三月七日、西岡英夫「話術に関する一考察（三）」（『第一教育』第九卷第三号）
 四月一日、西岡英夫「分類械闘と台湾人の民族性（二）」（『台湾警察時報』第七号）
 四月五日、西岡英夫「話術に関する一考察（四）」（『第一教育』第九卷第四号）
 四月一五日、西岡英夫「分類械闘と台湾人の民族性」（『台湾警察時報』第八号）
 五月一四日、西岡英夫「話術に関する一考察（五）」（『第一教育』第九卷第五号）
 ●五月一八日（午後一時～午後六時）、栄町の台湾日日新報社講堂において「台湾童話会春季大会」が開催された。その内容は以下の通りである。
- 一、「御あいさつ」会員 西岡塘翠
 - 一、「おはなし（六時の鐘）」城戸直之
 - 一、「斉唱（唱歌童謡）」南門小学校男生徒
 - 一、「おはなし（王様と少年）」会員 吉川省三
 - 一、「斉唱（唱歌童謡）」寿小学校女生徒
 - 一、「おはなし（仏蘭西の義勇少年）」会員 山口充一
 - 一、「御わかれの言葉」会員 上島靈基（以上、昼の部）
 - 一、「御あいさつ」会員 吉川省三
 - 一、「おはなし（一寸法師）」会員 行成弘三
 - 一、「斉唱（唱歌童謡）」建成小学校女生徒
 - 一、「おはなし（坊さんと猿）」会員 上島靈基
 - 一、「斉唱（唱歌童謡）」建成小学校男生徒
 - 一、「おはなし（狸の留守番）」会員 西岡塘翠
 - 一、「おわかれの言葉」会員 山口充一（以上、夜の部）
- 六月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三三五号）
 ●昭和五年六月一五日発行の『童話研究』第九卷第六号の「同人名簿1」によれば、台湾では「松山療養所、岩田義一／浦（ママ）里郵便局長 大久保彦左衛門／台北童話会主幹 西岡英夫」が同人となっている。そして「同人」については「此の名簿は本会役員、創立以来の会員、及び特に永久的会員として自薦せられた人々の中より選びたるものであります」との注意書きがある。
- 七月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三三六号）
 七月一〇日、西岡英夫「話術に関する一考察（六）」（『第一教育』第九卷第六号）
 八月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三三七号）
 ●八月五日、游珮芸（yun）『植民地台湾の児童文化』の「第一部・第三章・一般口演童話家の台湾行脚」によれば、一宮第一小学校訓導、名古屋児童教化研究会理事で日本童話協会名古屋支部の代表であった永井楽音が来台。西岡英夫の便宜で台湾各地の小学校や公学校で童話口演を行った。尚、永井楽音の経歴は游珮芸の同書中に『童話研究』等を参考にしてまとめたものがある。
- 八月九日、西岡英夫「話術に関する一考察（七）」（『第一教育』第九卷第七号）
 九月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三三八号）

- 九月一五日、西岡英夫「話術に関する一考察（八）」（『第一教育』第九卷第八号）
 一〇月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三三九号）
 一〇月一五日、西岡塘翠「小波先生と私」（『童話研究』第九卷第一〇号）
 一〇月一五日、西岡塘翠「白馬將軍吳鳳—巖谷小波先生にささげる」（『童話研究』第九卷第一〇号）
 一〇月一八日、西岡英夫「話術に関する一考察（九）」（『第一教育』第九卷第九号）
 十一月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三四〇号）
 十一月一五日、西岡英夫「話術に関する一考察（一〇）」（『第一教育』第九卷第一〇号）
 十一月一八日、台北製塩会社常務 西岡英夫「名家感想集」（木村定次郎編集発行『還暦記念 小波先生』）
 一二月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三四一号）
 一二月一七日、西岡英夫「話術に関する一考察（一一）」（『第一教育』第九卷第一一号）
 ■【一九三一年】（昭和六年）
 一月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三四二号）
 一月一日、西岡英夫「話術に関する一考察（一一（ママ）」（『第一教育』第一〇卷第一号）
 一月一〇日、西岡塘翠「田貫長左衛門の話（六）」（南国青年協会『南国青年』第八号）
 二月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三四三号）
 二月一〇日、西岡塘翠「田貫長左衛門の話（七）」（『南国青年』第九号）
 三月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三四四号）
 三月六日、西岡英夫「話術に関する一考察（一二）」（『第一教育』第一〇卷第三号）
 三月一五日、塘翠（西岡英夫）「伝説童話 熊と豹の話（蕃人から聞いた台湾生蕃童話の一つ）」（『童話研究』第一〇卷第二号）
 四月一日、西岡生「人々と語る」（『台湾教育』第三四五号）
 四月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三四五号）
 四月一日、西岡英夫「モダン蕃社『寒溪』に遊ぶ」（『台湾警察時報』第二九号）
 四月一五日、西岡英夫「モダン蕃社『寒溪』に遊ぶ」（『台湾警察時報』第三〇号）
 四月一七日、西岡英夫「話術に関する一考察（一三）」（『第一教育』第一〇卷第四号）
 四月、西岡英夫「熊と豹の話—蕃人から聞いた台湾生蕃童話」（『童話研究』第一〇卷第二号）
 ●游珮芸（yun）『植民地台湾の児童文化』の「第一部・第三章・一般口演童話家の台湾行脚」によれば、旧暦の正月頃、童話協会秋田支部代表で飽きた基督教童話研究会幹事の上遠野龍児が来台。西岡英夫等の協力を得て二ヶ月間、蕃社も含む台湾各地で童話口演を行った。尚、上遠野龍児の経歴は游珮芸の同書中に『童話研究』等を参考にしてまとめたものがある。
 五月一日、西岡塘翠「金之助少年と馬車屋の爺さん」（『台湾教育』第三四六号）
 五月一日、西岡生「人々と語る」（『台湾教育』第三四六号）
 五月一日、塘翠「俳句」（『台湾教育』第三四六号）
 五月一日、西岡塘翠「俳句」（『台湾時報』第一三八号）
 五月五日、西岡塘翠「田貫長左衛門の話（八）」（『南国青年』第一一号）
 五月一八日、西岡英夫「話術に関する一考察（一四）」（『第一教育』第一〇卷第五号）
 六月一日、西岡生「糸人と語る」（『台湾教育』第三四七号）
 六月一一日、西岡英夫「話術に関する一考察（一五）」（『第一教育』第一〇卷第六号）

- 七月一日、西岡生「人々と語る」(『台湾教育』第三四八号)
- 七月一日、塘翠「俳句」(『台湾教育』第三四八号)
- 七月九日、西岡英夫「話術に関する一考察(一六)」(『第一教育』第一〇卷第七号)
- 八月一日、塘翠「俳句」(『台湾教育』第三四九号)
- 九月一日、西岡生「人々と語る」(『台湾教育』第三五〇号)
- 九月一日、西岡英夫「話術に関する一考察(一七)」(『第一教育』第一〇卷第八号)
- 一〇月一日、西岡生「人々と語る」(『台湾教育』第三五一号)
- 一〇月一日発行の『童話研究』第一一巻第一〇号の「会員加盟」欄には「台湾 阿良田芳太郎(川平朝申紹介)／同 砥上種樹(西岡英夫紹介)／同 土持達郎(砥上種樹紹介)／同 平井三恭(山口浩紹介)／台湾 藤沢宏澄(砥上種樹紹介)／同 水上靈基(同)」とある。
- この年の一〇月頃、台北童話劇研究会創立、会誌『童劇』。「台北童話会」の一員であった新原保宏が東京の学校から台北に帰り、彼を中心にして「台北童話会」及び「赤づきん社」のメンバーが集まり、組織した。西岡英夫(顧問)、吉川省三(顧問)、新原保宏、岩石まさを、大西由枝、行成弘三、長船正人、塚本外茂、柴田関也、安武薫、中島俊男、新原すみ子、行成清子。年末に発会記念として台湾日日新報社講堂で、童話と紙芝居と童謡舞踊の「子供大会」を開催。
- 一〇月一〇日、西岡英夫「話術に関する一考察(一八)」(『第一教育』第一〇卷第九号)
- 一〇月一五日、西岡英夫「話術に関する一考察(一九)」(『第一教育』第一〇卷第一〇号)
- 一二月一日、西岡生「人々と語る」(『台湾教育』第三五三号)
- 一二月一日、西岡英夫「話術に関する一考察(二〇)」(『第一教育』第一〇卷第一一号)
- 不明『台湾蕃人風俗と生活』(雄山閣)
- 【一九三二年】(昭和七年)
- 一月一日、西岡生「人々と語る」(『台湾教育』第三五四号)
- 一月一日、塘翠「石蘭居句屑(申の一)」(『台湾教育』第三五四号)
- 一月一日、西岡英夫「話術に関する一考察(二一)」(『第一教育』第一一巻第一号)
- 二月一日、西岡英夫「話術に関する一考察(二二)」(『第一教育』第一一巻第二号)
- 二月一日、塘翠「石蘭居句屑(申の二)」(『台湾教育』第三五五号)
- 三月一日、西岡生「人々と語る」(『台湾教育』第三五六号)
- 三月一日、塘翠「石蘭居句屑(申の三)」(『台湾教育』第三五六号)
- 四月一日、塘翠「石蘭居句屑(申の四)」(『台湾教育』第三五七号)
- 五月一日、西岡生「人々と語る」(『台湾教育』第三五八号)
- 五月一日、塘翠「石蘭居句屑(申の五)」(『台湾教育』第三五八号)
- 五月一五日、塘翠子(西岡英夫)「童話の放送と私の思ひ出」(『第一教育』第一一巻第五号)
- 五月一五日、西岡英夫「話術に関する一考察(二五)」(『第一教育』第一一巻第五号)
- 六月一日、塘翠「石蘭居句屑(申の六)」(『台湾教育』第三五九号)
- 六月一五日、西岡英夫「話術に関する一考察(二六)」(『第一教育』第一一巻第六号)
- 六月一二日、塘翠子(西岡英夫)「童話行脚所感 台中州下を旅して(上)」(『第一教育』第一一巻第六号)
- 七月一日、塘翠「石蘭居句屑(申の七)」(『台湾教育』第三六〇号)

- 七月一日、西岡塘翠「コドモノ時間 満州昔話 お腹に入つた鬼の話」(『台湾日日新報』)
- 七月七日、塘翠子(西岡英夫)「童話行脚所感 台中州下を旅して(中)」(『第一教育』第一一巻第七号)
- 七月七日、西岡英夫「話術に関する一考察(二七)」(『第一教育』第一一巻第七号)
- 八月一日、西岡英夫「人々と語る」(『台湾教育』第三六一号)
- 八月一日、塘翠「石蘭居句屑(申の八)」(『台湾時報』第三六一号)
- 九月一日、西岡英夫「人々と語る(十四) 織田選手及び駒沢大学長」(『台湾教育』第三六二号)
- 九月一日、塘翠「石蘭居句屑(申の九)」(『台湾時報』第三六二号)
- 九月一日、西岡英夫「老鰻に関する考察」(『台湾警察時報』第五三号)
- 九月三日、西岡英夫「話術に関する一考察(二七(ママ))」(『第一教育』第一一巻第八号)
- 九月三日、塘翠子(西岡英夫)「童話行脚所感 台中州下を旅して(下)」(『第一教育』第一一巻第八号)
- 一〇月一日、西岡英夫「人々と語る(十五)」(『台湾教育』第三六三号)
- 一〇月一日、西岡英夫「老鰻に関する考察」(『台湾警察時報』第五四号)
- 一〇月七日、西岡英夫「話術に関する一考察(二八)」(『第一教育』第一一巻第九号)
- 十一月一日、西岡英夫「老鰻に関する考察」(『台湾警察時報』第五五号)
- 十一月三日、西岡塘翠「お話『お歌の力』(ラジオ)」(『台湾日日新報』)
- 十一月五日、西岡英夫「話術に関する一考察(二九)」(『第一教育』第一一巻第一〇号)
- 十二月一日、西岡英夫「老鰻に関する考察」(『台湾警察時報』第五六号)
- 十二月一二日、西岡英夫「話術に関する一考察(三〇)」(『第一教育』第一一巻第一一号)
- 【一九三三年】(昭和八年)
- 一月一日、西岡英夫「老鰻に関する考察」(『台湾警察時報』第二〇六号<通巻>)
- 一月二〇日、西岡英夫「話術に関する一考察(三一)」(『第一教育』第一二巻第一号)
- 一月二〇日、塘翠「癸酉新春口占(俳句)」(『第一教育』第一二巻第一号)
- 一月、西岡英夫「台湾人の迷信検討」(『社会事業の友』第五〇号)
- 二月一日、西岡英夫「老鰻に関する考察」(『台湾警察時報』第二〇七号)
- 二月二六日、塘翠「春の初旅 鶯嚙鼻行(句稿)」(『第一教育』第一二巻第二号)
- 二月、西岡英夫「台湾人の迷信検討」(『社会事業の友』第五一号)
- 三月一日、西岡英夫「童話の口演と聴かせ方に就て(上)」(『台湾教育』第三六八号)
- 四月一日発行の『童話研究』第一二巻第三号の附録「加盟会員」欄には「台湾 中島俊男(西岡英夫紹介)／同 平井三恭(同・重複)／同 城戸直之(同)／台湾 汪乃文／川平朝甫(砥上種樹紹介)／同 三浦正義(同)／同 宮脇良憲(同)／同 福田源次(同)／同 馬場源六(同)／同 三島徳次(同)／台湾 細野浩三(砥上種樹紹介)／同 吉岡峰次(同)」とある。
- 四月一日、西岡英夫「童話の口演と聴かせ方に就て(下)」(『台湾教育』第三六九号)
- 四月一日、塘翠「俳句」(『台湾教育』第三六九号)
- 四月一〇日、西岡英夫「話術に関する一考察(三二)」(『第一教育』第一二巻第三号)
- 四月一七日、西岡塘翠「童話 心の鍵と尺八(ラジオ)」(『台湾日日新報』)
- 四月一八日、西岡塘翠「尺八を持った謎の若者 童話 心の鍵と尺八(その二)(ラジオ)」(『台湾日日新報』)

- 五月一日、西岡英夫「恒春築城に絡はる悲恋物語」(『台湾時報』第一六二号)
- 六月一日、塘翠「城東文化村より」(『台湾教育』第三七一号)
- 六月一日、西岡英夫「恒春築城に絡はる悲恋物語」(『台湾時報』第一六三号)
- 六月五日、石蘭居塘翠「雑詠(俳句)」(『第一教育』第一二卷第五号)
- 六月、西岡英夫「話術に関する一考察(三三)」(『第一教育』第一二卷第六号)
- 六月、西岡英夫「探芳集英漫録」(『社会事業の友』第五五号)
- 七月一日、西岡英夫「恒春築城に絡はる悲恋物語」(『台湾時報』第一六四号)
- 七月、西岡英夫「探芳集英漫録」(『社会事業の友』第五六号)
- 八月一日、西岡英夫「恒春築城に絡はる悲恋物語」(『台湾時報』第一六五号)
- 九月一日、塘翠「暑熱に吟ず」(『台湾教育』第三七四号)
- 九月二五日、西岡英夫「話術に関する一考察(三四)」(『第一教育』第一二卷第七号)
- 一〇月一日、西岡英夫「台湾の秋と台湾人の行事」(『台湾時報』第一六七号)
- 一〇月一八日、西岡英夫「話術に関する一考察(三五)」(『第一教育』第一二卷第八号)
- 十一月一日、塘翠「秋を迎えて(上)」(『台湾教育』第三七六号)
- 十一月一日、西岡英夫「浮洲部落『社子』(上) 島都の近い特殊部落の郷土的観察」(『台湾時報』第一六八号)
- 十一月二〇日、西岡英夫「話術に関する一考察(三六)」(『第一教育』第一二卷第九号)
- 十一月二〇日、西岡英夫「故巖谷小波先生の追憶」(『第一教育』第一二卷第九号)
- 十一月二〇日、塘翠「秋窓漫吟七十九句(上)」(『第一教育』第一二卷第九号)
- 十二月一日、塘翠「金風颯々吟」(『台湾教育』第三七七号)
- 十二月一日、西岡英夫「浮洲部落『社子』(下) 島都の近い特殊部落の郷土的観察」(『台湾時報』第一六九号)
- 十二月二日、塘翠「秋窓漫吟七十九句(下)」(『第一教育』第一二卷第一〇号)
- 十二月二日、西岡英夫「話術に関する一考察(三七)」(『第一教育』第一二卷第一〇号)
- 【一九三四】(昭和九年)
- 一月一日、西岡英夫「話術に関する一考察(三八)」(『第一教育』第一三卷第一号)
- 一月一日、塘翠「甲戌新年口吟三十句」(『第一教育』第一三卷第一号)
- 一月一日、西岡英夫「巖谷小波先生」(『台湾教育』第三七八号)
- 一月一日、塘翠「歳末年始に吟ず」(『台湾教育』第三七八号)
- 一月二〇日、この日昭和二年に世界童話大系刊行会から出版した「台湾童話集／生蕃童話集」に「朝鮮童話集」二七篇と「アイヌ童話集」七三篇を加え、「世界童話大系普及版・日本童話集下巻」として東京の金正堂から刊行。
- 二月二八日、西岡英夫「話術に関する一考察(終)」(『第一教育』第一三卷第二号)
- 二月二八日、西岡英夫「皇儲御降誕を奉祝恭賦し(俳句)」(『第一教育』第一三卷第二号)
- 三月一日、塘翠「南国の冬に吟ず」(『台湾教育』第三八〇号)
- 三月一日、西岡英夫「緋桜咲く寒溪五社(モダンな行き易い蕃社)」(『台湾時報』第一七二号)
- 四月一日、西岡英夫「緋桜咲く寒溪五社(モダンな行き易い蕃社)中」(『台湾時報』第一七三号)
- 四月初旬、游珮芸(yun)『植民地台湾の児童文化』の「第一部・第三章・一般口演童話家の台湾行脚」によれば、島根県益田町出身で元小学校校長、日本童話協会特別会員講師支部長の岡崎久喜が来台。西岡英夫等の取り計らい台湾各地の幼稚園・小学校や公学校で七

○日間に渡って童話口演を行った。尚、岡崎久喜の経歴は游珮芸の同書中に『童話研究』等を参考にしてまとめたものがある。

五月一日、塘翠「風薫るこの頃」（『台湾教育』第三八二号）

五月一日、西岡英夫「緋桜咲く寒溪五社（モダンな行き易い蕃社）下」（『台湾時報』第一七四号）

五月八日、西岡英夫「軍用犬『ペス』の話（昭和九年一月一日JFAKにて放送）」（『第一教育』第一三卷第四号）

五月、西岡英夫（塘翠）「童話 この母この子」（『社会事業の友』六六）

●五月、西岡英夫（顧問）、吉川省三（顧問）、城戸直之、水田敏夫、川平朝申、中島俊男、佐々木亀夫、伊藤健一、安武薫、鶴丸資光、行成弘三、行成清子、木浦直之等が「台北児童芸術聯盟」を創設。

六月一日、塘翠「長嬴の季に入りて」（『台湾教育』第三八三号）

六月一日、西岡塘翠「俳句」（『台湾時報』第一七五号）

六月一日、西岡英夫「お母さまと童話の扱方」（『台湾婦人界』六月号）

七月一日、西岡英夫「お母さまと童話の扱方（承前）」（『台湾婦人界』七月号）

七月二三日、西岡英夫「佳き端午のお節句（上）」（『第一教育』第一三卷第六号）

八月一日、塘翠「熱風の下に吟ず」（『台湾教育』第三八五号）

九月一日、西岡英夫「逝きし天随久保博士の事ども」（『台湾教育』第三八六号）

九月二八日、西岡英夫「佳き端午のお節句（中）」（『第一教育』第一三卷第七号）

一〇月、西岡英夫「台湾人の住宅問題」（『社会事業の友』第七一号）

十一月一日、西岡英夫「台北州農業伝習所と三角埔（上）」（『台湾時報』第一八〇号）

十一月五日、西岡英夫「正しき者は強し（一一）」（台湾教育会社会教育部『黎明』三〇号）

十二月一日、西岡英夫「台北州農業伝習所と三角埔（下）」（『台湾時報』第一八一号）

十二月一〇日、西岡英夫「佳き端午のお節句（下）」（『第一教育』第一三卷第八号）

■【一九三五】（昭和一〇年）

一月一日、西岡英夫「台北州農業伝習所と三角埔」（『台湾時報』第一八二号）

○一月一日、西岡塘翠「植ゑた白薔薇（上）美しい女性物がたり」（『第一教育』第一四卷第一号）

一月一五日、西岡英夫「正しき者は強し（一二）」（『黎明』第三二号）

一月一五日、西岡英夫「猪と豚になつた兄弟の話」（『薫風』第三二号）

●二月七日、台北児童芸術聯盟の機関誌『童心』創刊。この号に掲載された「会員名簿」に「西岡英夫 会長・顧問 台北市大正町三條通り」とある。尚、会員には「伊藤康壽（顧問・台北市）、佐々木亀雄（顧問・総督府文教局社会課）、吉川省三（顧問・台北市表町二ノ一〇 台湾子供世界社）、城戸直之（台北市）、川平朝申（台北市）、水田敏夫（台北市）、中島俊男（台北市役所水道課出張事務所）、上田稔（台北市）、和宇慶佳栄（台北市）、伊藤健一（台北市）、安武薫（台北市）、平野保童（台北市）、行成弘三（台北市）、行成清子（台北市）、山口充一（基隆市）、木浦直良（士林街）、大西由枝（宜蘭街）、宮部太郎（入営中・新竹市）」がいた。

二月一五日、西岡英夫「正しき者は強し（一三）」（『黎明』第三三号）

二月、西岡塘翠「植ゑた白薔薇（下）美しい女性物がたり」（『第一教育』第一四卷第二号）

二月、西岡英夫「土産話秋宵剪灯漫談録」（『社会事業の友』第七五号）

- 三月一五日、西岡英夫「正しき者は強し（一四）」（『黎明』第三四号）
- 四月、西岡英夫「みやげ話 秋宵剪灯漫談録」（『社会事業の友』第七七号）
- 四月一五日、西岡英夫「正しき者は強し（一五）」（『黎明』第三五号）
- 五月一日、西岡英夫「口演--資料 守れ約束!!人の務め（一）--美しい日本武士の心意気」（『第一教育』第一四卷第三号）
- 五月一日、塘翠「内地帰省放吟旅寝の折々一」（『台湾教育』第三九四号）
- 六月一日、塘翠「内地帰省放吟旅寝の折々二」（『台湾教育』第三九五号）
- 不明、西岡英夫「口演--資料 守れ約束!!人の務め（三（ママ））--美しい日本武士の心意気」（『第一教育』第一四卷第四号）
- 七月一日、塘翠「内地帰省放吟旅寝の折々三」（『台湾教育』第三九六号）
- 八月一日、塘翠「内地帰省放吟旅寝の折々四」（『台湾教育』第三九七号）
- 八月、西岡英夫「台湾民衆娯楽と其一考察（一）」（『社会事業の友』第八一号）
- 九月一日、塘翠「内地帰省放吟旅寝の折々五」（『台湾教育』第三九八号）
- 九月一五日、西岡英夫「選挙物語 清き父の一票」（『薰風』第四〇号）
- 一〇月一日、塘翠「内地帰省放吟旅寝の折々六」（『台湾教育』第三九九号）
- 一〇月一日、西岡塘翠「台湾に於ける小波先生（一）」（『童話研究』第一五卷第五号）
- 一〇月、西岡英夫「台湾民衆娯楽と其一考察（二）」（『社会事業の友』第八三号）
- 十一月一日、塘翠「内地帰省放吟旅寝の折々七」（『台湾教育』第四〇〇号）
- 十一月一日、西岡英夫「流に枕す山紫水明の郷『石碇』」（『台湾時報』第一九二号）
- 十一月一日、西岡塘翠「台湾に於ける小波先生（二）」（『童話研究』第一五卷第六号）
- 十一月一〇日、TOSUI 生（西岡英夫）「僕のサンドウイツチ物語」（『台湾婦人界』十一月号）
- 十一月、西岡英夫「台湾の矯風運動と老人再教育（上）」（『社会事業の友』第八四号）
- 一二月一日、塘翠「内地帰省放吟旅寝の折々八」（『台湾教育』第四〇一号）
- 一二月一日、西岡英夫「流に枕す山紫水明の郷『石碇』」（『台湾時報』第一九三号）
- 一二月、西岡英夫「台湾の矯風運動と老人再教育（下）」（『社会事業の友』第八五号）
- 【一九三六】（昭和十一年）
- 一月一日、西岡英夫「台湾国語教育と標準語及び方言声音教育と或日の問題（一）」（『台湾教育』第四〇二号）
- 一月一日、塘翠「内地帰省放吟旅寝の折々（終）」（『台湾教育』第四〇二号）
- 一月一日、西岡塘翠「豹と熊の話（上）」（『専売通信』第一五卷第一号）
- 二月一日、西岡英夫「台湾国語教育と標準語及び方言声音教育と或日の問題（二）」（『台湾教育』第四〇三号）
- 二月一日、塘翠「丙子句稿 迎春雑賦」（『台湾教育』第四〇三号）
- 二月一日、西岡英夫「故逍遙博士と台湾（上）」（『台湾時報』第一九五号）
- 二月五日、西岡塘翠「豹と熊の話（下）」（『専売通信』第一五卷第二号）
- 三月一日、西岡英夫「台湾国語教育と標準語及び方言声音教育と或日の問題（三）」（『台湾教育』第四〇四号）
- 三月一日、塘翠「丙子句帖 浅き春を吟ず」（『台湾教育』第四〇四号）
- 三月一日、西岡英夫「故逍遙博士と台湾（下）」（『台湾時報』第一九六号）
- 四月一日、西岡英夫「台湾国語教育と標準語及び方言声音教育と或日の問題（四）」（『台湾

教育』第四〇五号)

四月一日、西岡英夫「花まつりと洗仏節」(南瀛仏教会『南瀛仏教』第一四卷第四期)

四月一日、塘翠「丙子句帖 春寒雜興吟」(『台湾教育』第四〇五号)

四月一日、西岡英夫「台北近郊遍歴、中和庄の巻」(『台湾時報』第一九七号)

●四月一日発行の『童話研究』第一六卷第四号の「新しき同志」欄に「台北 栗屋則道／同上森大輔(西岡英夫紹介)／台南 福本勉三郎(大小(ママ)舜正紹介)／」とある。

四月、西岡英夫「F氏の手紙」(『社会事業の友』第八九号)

五月一日、西岡英夫「仏教で云ふ四恩の話――忘れてはならぬ大切なこと」(南瀛仏教会『南瀛仏教』第一四卷第五期)

五月一日、塘翠「丙子句帖 春を待ちつ」(『台湾教育』第四〇六号)

五月一日、西岡英夫「台北近郊遍歴、中和庄の巻」(『台湾時報』第一九八号)

五月、西岡英夫「乳幼児愛護週間と端午の節句」(『社会事業の友』第九〇号)

六月一日、西岡英夫「仏の説かれる三宝の恩」(『南瀛仏教』第一四卷第六期)

六月一日、西岡英夫「台湾国語教育と標準語及び方言声音教育と或日の問題」(『台湾教育』第四〇七号)

六月一日、石蘭居塘翠「私の俳句は楽俳主義」(『台湾教育』第四〇七号)

六月一日、塘翠「丙子句帖 春来るに吟ず」(『台湾教育』第四〇七号)

六月一日、西岡英夫「台北近郊遍歴、中和庄の巻」(『台湾時報』第一九九号)

六月、西岡英夫「乳幼児愛護週間と端午の節句」(『社会事業の友』第九一号)

七月一日、西岡英夫「孟蘭盆会と台湾の公普」(『南瀛仏教』第一四卷第七期)

七月一日、塘翠「丙子句帖 青葉の窓に凭りて」(『台湾教育』第四〇八号)

八月一日、西岡英夫「施餓鬼と台湾の普渡」(『南瀛仏教』第一四卷第八期)

八月一日、西岡英夫「所謂三分間芸術の体験」(『台湾教育』第四〇九号)

八月一日、石蘭居生「所謂台湾句と季題季感」(『台湾教育』第四〇九号)

八月一日、塘翠「丙子句帖 流汗と拭ひつ」(『台湾教育』第四〇九号)

九月一日、西岡英夫「彼岸と放生会の話」(『南瀛仏教』第一四卷第九期)

九月一日、塘翠「丙子句帖 暑熱に喘ぎつ」(『台湾教育』第四一〇号)

一〇月一日、石蘭居主「作句の精進と多作濫作」(『台湾教育』第四一一号)

一〇月一日、塘翠「丙子句集 夏漸く去らんとす」(『台湾教育』第四一一号)

一〇月七日、塘翠西岡英夫「懐しい名尾上新兵衛君(我等の久留島先生<名家感想集>」(家の教育社『いぬはりこ』)尚、「名家感想集」のタイトルを「日本童話界の師父久留嶋先生を讃ふ」に替えた別刷りも出ている。

一一月一日、西岡英夫「報恩講と親鸞聖人」(『南瀛仏教』第一四卷第一一期)

一一月一日、たうすい「撞球競技会参加記」(『台湾教育』第四一二号)

一一月一日、塘翠「丙子句集 秋風吹く窓」(『台湾教育』第四一二号)

一一月一日、西岡英夫「台北近郊遍歴、松山庄の巻(上)」(『台湾時報』第二〇四号)

一一月、西岡英夫「民風作興と国旗運動」(『社会事業の友』第九六号)

一二月一日、西岡英夫「成道会と除夜の鐘」(『南瀛仏教』第一四卷第一二期)

一二月一日、西岡英夫「台北近郊遍歴、松山庄の巻(中)」(『台湾時報』第二〇五号)

一二月一日、石蘭居主人「俳書の精読と句の鑑賞」(『台湾教育』第四一三号)

一二月一日、塘翠「丙子句集 短き秋の訪れて」(『台湾教育』第四一三号)

一二月、西岡英夫「民風作興と国旗運動」(『社会事業の友』第九七号)

■【一九三七】(昭和一二年)

一月一日、西岡英夫「御忌詣と法然上人」(『南瀛仏教』第一五卷第一期)

一月一日、石蘭居士「新年勅題と勅題吟」(『台湾教育』第四一四号)

一月一日、塘翠「丙子句集 晩秋に吟ず」(『台湾教育』第四一四号)

一月一日、西岡英夫「台北近郊遍歴、松山庄の巻(下)」(『台湾時報』第二〇六号)

一月、西岡英夫「年頭にあたりて」(『社会事業の友』第九八号)

二月一日、西岡英夫「涅槃会と遺教経会」(『南瀛仏教』第一五卷第二期)

二月一日、塘翠「稿句 歳末の巷に吟ず」(『台湾教育』第四一五号)

二月一〇日、にしをか・ひでを「牛売り馬売り問答(中) うし年に因んで」(『専売通信』第一六卷第二号)

●二月二八日、日本児童劇協会第四回定期総会において西岡英夫が新会員に推薦承認された(『児童劇』第一三号)。

三月一日、西岡英夫「春秋彼岸と皇霊祭」(南瀛仏教会『南瀛仏教』第一五卷第三期)

三月一〇日、にしをか・ひでを「牛売り馬売り問答(下) うし年に因んで」(『専売通信』第一六卷第三号)

三月、西岡英夫「国民精神の涵養と国歌君が代」(『社会事業の友』第一〇〇号)

四月一日、西岡英夫「聖霊会と聖徳太子」(『南瀛仏教』第一五卷第四期)

五月一日、西岡英夫「大楠公正成と仏縁」(『南瀛仏教』第一五卷第五期)

五月一日、塘翠「丁丑句稿 遅日抄一」(『台湾教育』第四一八号)

五月一日、西岡英夫「可愛い子にお話するには」(『社会事業の友』一〇二)

六月一日、西岡英夫「比叡山と伝教大師」(『南瀛仏教』第一五卷第六期)

六月一日、塘翠「丁丑句稿 遅日抄二」(『台湾教育』第四一九号)

七月一日、西岡英夫「魂まつりと盆行事」(『南瀛仏教』第一五卷第七期)

七月一日、塘翠「丁丑句稿 薫風抄」(『台湾教育』第四二〇号)

七月二三日、にしをかひでを「時計を買ったお爺さん」(『専売通信』第一六卷第七号)

八月一日、西岡英夫「一遍上人忌と時宗」(『南瀛仏教』第一五卷第八期)

九月一日、西岡英夫「不動尊とその信仰」(『南瀛仏教』第一五卷第九期)

九月一日、塘翠「丁丑句稿 嚙氷抄」(『台湾教育』第四二二号)

一〇月一日、西岡英夫「十夜とお会式の話」(『南瀛仏教』第一五卷第一〇期)

一〇月一日、西岡英夫「国語教育と声音に就て(一)」(『台湾教育』第四二三号)

一〇月一日、西岡英夫「空也念仏と鉢叩き」(『南瀛仏教』第一五卷第一一期)

一〇月一日、西岡英夫「国語教育と声音に就て(承前・完)」(『台湾教育』第四二四号)

一〇月一日、塘翠「丁丑句稿 金風抄」(『台湾教育』第四二四号)

一二月一日、西岡英夫「禅林の修行雪安居」(『南瀛仏教』第一五卷第一二期)

■【一九三八】(昭和一三年)

一月一日、西岡英夫「寒行と寒念仏の話」(『南瀛仏教』第一六卷第一期)

一月一日、西岡英夫「虎を取材の台湾口碑伝説」(『台湾教育』第四二六号)

一月一日、塘翠「戦勝の新春 句帖の中から」(『台湾教育』第四二六号)

- 二月一日、西岡英夫「僧西行と兼好法師」(『南瀛仏教』第一六卷第二期)
- 二月一日、西岡英夫「虎を取材の台湾口碑伝説(その二)」(『台湾教育』第四二七号)
- 三月一日、西岡英夫「修二会と御水取り」(『南瀛仏教』第一六卷第三期)
- 三月一日、塘翠「訪れし来し島の冬」(『台湾教育』第四二八号)
- 三月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾時報』第二二〇号)
- 四月一日、西岡英夫「四国遍路と清明節」(『南瀛仏教』第一六卷第四期)
- 四月一日、西岡英夫「在り日の子爵と侯爵」(『台湾教育』第四二九号)
- 五月一日、西岡英夫「薬師如来と不動尊」(『南瀛仏教』第一六卷第五期)
- 五月一日、塘翠「作句家の作風検討(上)」(『台湾教育』第四三〇号)
- 五月一日、塘翠「短き春来にけり」(『台湾教育』第四三〇号)
- 六月一日、西岡英夫「写経会と四句の偈」(『南瀛仏教』第一六卷第六期)
- 六月一日、西岡英夫「逝く春悲し」(『台湾教育』第四三一号)
- 六月六日、夜七時の「子供の時間」に台北放送局(JFAK)から西岡英夫口演のお伽噺「鬼だまし」を放送した。「ラヂオ」欄(西岡の写真入)には「今日は明治大正時代のお伽噺の大先生として御存じの巖谷小波先生の誕生日に当るので、それにちなんで同先生と親交のあつた西岡先生が巖谷先生の作『鬼だまし』をお話下さいます。ちなみに巖谷先生は昭和八年九月五日六十六でなくなられました」とある。尚、同時間に台中放送局では「童話『豆太郎』渡辺忠雄」、台南放送局では「お話『小使さんの応召』郭孟揚」が放送された。
- 七月一日、西岡英夫「観世音と台湾の齋教」(『南瀛仏教』第一六卷第一期)
- 七月一日、塘翠「作句家の作風検討(下)」(『台湾教育』第四三二号)
- 八月一日、西岡英夫「地藏菩薩と六地藏」(『南瀛仏教』第一六卷第八期)
- 八月一日、塘翠「真夏のこの頃」(『台湾教育』第四三三号)
- 九月一日、西岡英夫「弥陀仏と四十八願」(『南瀛仏教』第一六卷第九期)
- 九月一日、塘翠「氷を嚼みて」(『台湾教育』第四三四号)
- 九月一日、たうすゐ(西岡英夫)「お伽芝居の話(一)」(『台湾芸術新報』第四卷第九号)
- 九月一五日、西岡塘翠「俳句」(『台湾時報』第二二六号)
- 一〇月一日、西岡英夫「達磨大師と維摩忌」(『南瀛仏教』第一六卷第一〇期)
- 一〇月一日、たうすゐ(西岡英夫)「お伽芝居の話(二)」(『台湾芸術新報』第四卷第一〇号)
- 一〇月一日、西岡英夫「ラヂオの放送子供の時間に就て」(『台湾教育』第四三五号)
- 一〇月一日、塘翠「苦熱に喘ぐ」(『台湾教育』第四三五号)
- 一〇月一日、西岡英夫「一休和尚と其母」(『南瀛仏教』第一六卷第一一期)
- 一〇月一日、塘翠「初秋の訪れ」(『台湾教育』第四三六号)
- 一〇月一日、たうすゐ(西岡英夫)「お伽芝居の話(三)」(『台湾芸術新報』第四卷第一一号)
- 一二月一日、西岡英夫「臨済の名僧関山国師」(『南瀛仏教』第一六卷第一二期)
- 一二月一日、塘翠「秋ともなりて」(『台湾教育』第四三七号)
- 一二月一日、たうすゐ(西岡英夫)「お伽芝居の話(完)」(『台湾芸術新報』第四卷第一二号)
- 月日不明、西岡英夫「お伽芝居の話」(日本児童劇協会『児童劇』第二九号)
- 【一九三九】(昭和一四年)
- 一月一日、西岡英夫「仏縁深き七福神の話」(『南瀛仏教』第一七卷第一期)
- 一月一日、西岡英夫「台湾の伝説口碑と兎」(『台湾教育』第四三八号)

二月一日、西岡英夫「道元禅師と修証義」(『南瀛仏教』第一七卷第二期)
 二月一日、西岡英夫「台湾の伝説口碑と兎(二)」(『台湾教育』第四三九号
 新報)

二月一三日、西岡塘翠「俳句」(『台湾時報』第二三一号)

三月一日、西岡英夫「蓮如上人と本願寺」(『南瀛仏教』第一七卷第三期)

三月一八日、西岡塘翠「俳句」(『台湾時報』第二三二号)

四月二四日、西岡塘翠「俳句」(『台湾時報』第二三三号)

五月一日、西岡英夫「蓮曼陀羅と中将姫」(『南瀛仏教』第一七卷第五期)

六月一日、西岡英夫「明智風呂と竹伐り」(『南瀛仏教』第一七卷第六期)

●六月一〇日、『児童街』創刊(台北児童芸術協会<台北市表町子供世界社内>機関誌。編輯・
 発行人は吉川省三)。構成会員は西岡英夫(顧問)、山口充一(賛助員)、吉鹿則行(同前)、
 吉川省三(同前)、村上勇(同前)、中山侑(同前)、小原伊登子(同前)、川平朝申(銀の
 光子供楽園)、川平朝甫(銀の光)、川平朝宜(銀の光)、日高紅椿(日高児童楽園)、福田
 九十九(日高)、竹内治(ねむの木子供楽園)、行成弘三(ねむの木)、内田貞三(ねむの木)、
 鶴丸資光(日の丸児童会)、相馬森一(南の星子供サークル)、吉川誠一(南の星)、上田稔(愛
 国児童会)、横尾イマ(なでしこ児童楽園)、行成清子(行成舞踊研究会)、中島俊男(パ
 ヤノ木オハナシクラブ)。創刊号に七条の「協会規約」(日に一三条になる)がある。創刊号の
 掲載は次の通り(以下、「会員名簿」まで)。

六月一〇日、西岡英夫「児童芸術の精進に就て」(『児童街』創刊号)

七月一日、西岡英夫「魂祭と京の大文字」(『南瀛仏教』第一七卷第七期)

八月六日、西岡塘翠(童話家)「敬語と方言(特輯・はがき随筆)」(『台湾日日新報』)

九月一日、西岡英夫「白蓮の花散る朝(恩師故鈴木稲作先生を偲ぶ)」(『台湾教育』第
 四四六号)

九月二八日、西岡英夫「幼年童話の話方に就て」(『児童街』第四号)

■【一九四〇】(昭和十五年)

一月一日、西岡英夫「華甲の宴和かに」(『台湾教育』第四五〇号)

●二月一八日、台北放送局(JFAK)が放送童話劇『鯨祭』(原作・西岡英夫<塘翠>/脚色・
 中山侑)を「子供の時間」に全国中継した。アミ族の「里 \boxtimes と云ふ蕃社」に伝わった話を西岡
 が童話化し、中山が劇化したもので、この年の三月には小冊子も出た。

三月一日、塘翠「俳句」(『台湾教育』第四五二号)

五月一日、西岡英夫「最近の国語問題について」(『台湾教育』第四五四号)

六月、西岡英夫「(おとぎばなし)鯉のおみやげ」(『児童街』第二卷第三号)

●六月発行の『児童街』第二卷第三号に「台北児童芸術協会加盟団体」が出ている。創設
 時とかなり異なり、以下の通りである。

<「ねむの木子供倶楽部」(児玉町三ノ九)

竹内治、行成弘三、内田貞二、宮田国弥、只野茂、佐野政彦

「なでしこ児童楽園」(大正町一ノ三一)

横尾イマ

「コスモス座」(川端町一八九)

長船正人、江里口孟

「銀の光子供樂園」

川平朝申、川平朝甫、川平朝宜、福留栄、新幸雄、比嘉博

「日の丸児童会」(幸町一八〇)

鶴丸詩光、児玉孝雄、永井隆

「日高児童樂園」

日高紅椿、福田九十九

「顧問」

西岡英夫

「賛助員」

山口充一、細野浩三、吉川省三、吉鹿則行、村山勇、宮田弥太郎、中山侑、豊田義次、野村幸一、黄得時>

一一月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾時報』第二五一号)

一一月一日、西岡英夫「史談大石良雄と葉隠武士(上)」(『台湾教育』第四六〇号)

一二月一日、西岡英夫「史談大石良雄と葉隠武士(下)」(『台湾教育』第四六一号)

■【一九四一】(昭和一六年)

一月五日、西岡英夫「山田長政の話(玄)」(『薰風』改題『青年之友』第一一五号)

二月一日、西岡英夫「辛巳の巳に因みて蛇と台湾の伝説口碑(上)」(『台湾教育』第四六三号)

二月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四六三号)

二月五日、西岡英夫「山田長政の話(黄)」(『青年之友』第一一六号)

三月一日、西岡英夫「辛巳の巳に因みて蛇と台湾の伝説口碑(中)」(『台湾教育』第四六四号)

三月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四六四号)

四月一日、西岡英夫「辛巳の巳に因みて蛇と台湾の伝説口碑(下)」(『台湾教育』第四六五号)

四月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四六五号)

五月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四六六号)

六月五日、西岡英夫「八幡船と御朱印船の話」(『青年之友』第一二〇号)

七月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四六八号)

七月五日、西岡英夫「八幡船と御朱印船の話(中)」(『青年之友』第一二一号)

七月二七日、西岡英夫「長唄愛好」(『台湾日日新報』)

八月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四六九号)

八月五日、西岡英夫「八幡船と御朱印船の話(下)」(『青年之友』第一二二号)

九月一日、西岡英夫「辛巳の巳に因みて蛇と台湾の伝説口碑(続)」(『台湾教育』第四七〇号)

九月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四七〇号)

一〇月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四七一号)

一十一月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四七二号)

一二月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四七三号)

不明、西岡英夫「仏教行事孟蘭盆会に就いて」(南瀛仏教会『台湾仏教』)

不明、西岡英夫「花まつりに就いて」(南瀛仏教会『台湾仏教』)

■【一九四二】(昭和一七年)

一月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四七四号)

一月五日、西岡英夫「山田長政の話(玄)」(『青年之友』第一一五号)

- 二月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四七五号)
 二月五日、西岡英夫「山田長政の話(黄)」(『青年之友』第一一六号)
 三月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四七六号)
 四月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四七七号)
 五月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四七八号)
 六月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四七九号)
 六月五日、西岡英夫「八幡船と御朱印船の話」(『青年之友』第一二〇号)
 七月一日、西岡英夫「南洋に伝はる伝説民話『羽衣』(上)」(『台湾教育』第四八〇号)
 七月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四八〇号)
 七月五日、西岡英夫「八幡船と御朱印船の話(中)」(『青年之友』第一二一号)
 八月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四八一号)
 八月五日、西岡英夫「八幡船と御朱印船の話(下)」(『青年之友』第一二二号)
 九月一日、西岡英夫「南洋に伝はる伝説民話『羽衣』(中)」(『台湾教育』第四八二号)
 九月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四八二号)
 一〇月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四八三号)
 十一月一日、西岡英夫「南洋に伝はる伝説民話『羽衣』(下)」(『台湾教育』第四八四号)
 十一月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四八四号)
 十二月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四八五号)
- 【一九四三】(昭和一八年)
- 一月一日、西岡英夫「勸奨する新愛国百人首」(『台湾教育』第四八六号)
 一月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四八六号)
 一月一日、西岡英夫「年頭に当りて台湾僧家に致す」(南瀛仏教会『南瀛仏教会会報』)
 四月二五日、西岡英夫「在家から僧家への希望」(南瀛仏教会『南瀛仏教会会報』)
 五月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四九〇号)
 六月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四九一号)
 九月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四九四号)
 十一月一日、西岡英夫「南方で拾った『太陽征伐』の伝説(上)」(『台湾教育』第四九六号)
 十一月一日、西岡塘翠「俳句」(『台湾教育』第四九六号)
 十二月一日、西岡英夫「南方で拾った『太陽征伐』の伝説(下)」(『台湾教育』第四九七号)

*終戦前後は「台北市御成町四丁目二番地之五」(現・中山北路二段一一八巷一四号)の木造の持ち家に住んでいたようである。